The Interreligious Gathering of Prayer for World Peace

比叡山宗教サミット35周年記念

世界宗教者平和の祈りの集い

2022(令和4)年8月4日

気候変動と宗教者の責務

Climate Change and Duties of Religious Leaders

THE INTERRELIGIOUS GATHERING OF PRAYER FOR WORLD PEACE

比叡山宗教サミット35周年記念

世界宗教者平和の祈りの集い

2022(令和4)年8月4日
国立京都国際会館／比叡山上

気候変動と宗教者の責務

CLIMATE CHANGE AND DUTIES OF RELIGIOUS LEADERS

主催：比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」実行委員会

開会式典 Opening Ceremony

8月4日(木)
国立京都国際会館

人類喫緊の課題である気候変動問題をとり上げ
「気候変動と宗教者の責務」をテーマに
比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が開催された

日本在住の外国の方々も参加

式典参加者の受付

開会式典

Opening Ceremony

8月4日(木)
国立京都国際会館

交歓をする宗教者たち

シンポジウムに向け打合せをするパネリストとコーディネーター

開会式典 Opening Ceremony

8月4日(木)
国立京都国際会館

登壇した日本の諸宗教代表者と海外招請者

海外招請者の聖エジディオ共同体
アジア地域担当部長
アゴスティーノ・ジョバニョーリ氏

司会をつとめる和多善秀実行委員会総務部長（右）

開会式典

OPENING CEREMONY

8月4日(木)
国立京都国際会館

阿部昌宏実行委員会委員長による開会挨拶

阿部実行委員長へ平和のメッセージが手渡される

ローマ教皇よりの平和のメッセージ
を披露するレオ・ボッカルディ
ローマ教皇庁駐日特命全権大使

講演者

寺島実郎 氏

一般財団法人日本総合研究所会長／多摩大学学長

テーマ

歴史的大転換期における宗教
―心の回復力（レジリエンス）を求めて―

記念講演 Memorial Lecture

8月4日（木）
国立京都国際会館

1947年、北海道に生まれる。1973年、早稲田大学大学院政治学研究科修士課程修了後、三井物産株式会社に入社。同社ワシントン事務所所長、戦略研究所所長、常務執行役員などを歴任。日本総合研究所理事長を経て、現在は日本総合研究所会長、多摩大学学長。その他、各省庁や企業などの委員やアドバイザーなどを多く務める。著書に『脳力のレッスンⅠ～Ⅴ』『日本再生の基軸』『世界を知る力』他。最新の著書『人間と宗教あるいは日本人の心の基軸』では経済人として世界を歩いてきた広範な経験と知識を元に生命の意味を再考し、体験的宗教論で現代人と宗教のあり方について問いかけている。

記念講演 MEMORIAL LECTURE

8月4日(木)
国立京都国際会館

聴講する参加者

「自らの視界を広げ、相対するものに正面から向き合い、その視界の重心を下げ、相手の立場に踏み込み共感し心を動かすこと。美や正義、全体知に対して意識を向ける力こそが、世界における宗教者の役割だ」

会場となった国立京都国際会館には多くの宗教者や関係者が参加

テーマ

気候変動と宗教者の責務

4名のパネリストによるシンポジウムが行われた。霊的生命観や気候変動の影響を最前線で受けて生きる人々の実体験など、宗教を通じたさまざまな観点からの提言がなされ、テーマである「宗教者の責務」の重要性を再確認し共有された。

シンポジウム SYMPOSIUM

パネリスト

薗田　稔 師（秩父神社宮司）
ジェームズ・バグワン 師（太平洋教会協議会事務総長）
竹村牧男 氏（東洋大学名誉教授）
デスモンド・カーヒル 氏（アジア宗教者平和会議実務議長）

コーディネーター
和田恵久巳実行委員

8月4日(木)
国立京都国際会館

ジェームズ・バグワン 師［フィジー］

太平洋教会協議会（PCC）事務総長。PCCはフィジーの首都スバに本部を構え、18の太平洋島嶼国・地域が加盟する地域最大のキリスト教エキュメニカル組織。メソジスト教会牧師であるバグワン師は気候変動の影響に現在進行形で直面する太平洋島嶼国の宗教代表者として、さまざまな国際会議においてスピーチや提唱を行う。

薗田　稔 師

1936年、東京生まれ。1965年東京大学大学院博士課程修了。國學院大學助教授、教授、京都大学大学院教授、國學院大學神道文化学部特任教授、皇學館大学大学院特任教授を歴任。現在、秩父神社宮司、京都大学名誉教授、NPO法人社叢学会理事長。専門は宗教学や民俗学の視点からの神道、日本宗教史。主な著書に『神道の世界』、『文化としての神道ー続・誰でもの神道』、他多数。

デスモンド・カーヒル 氏［オーストラリア］

アジア宗教者平和会議（ACRP）実務議長、ロイヤルメルボルン工科大学名誉教授。都市社会学を専門とする。現在も世界宗教者平和会議オーストラリア委員会議長を務める。2010年オーストラリア勲章受勲。

竹村　牧男 氏

1948年、東京生まれ。東京大学文学部卒。文化庁宗務課専門職員、三重大学人文学部助教授、筑波大学教授（哲学・思想学系）等を経て、2009年9月から2020年3月まで、東洋大学学長。現在、世界宗教者平和会議日本委員会平和研究所所長、筑波大学名誉教授、東洋大学名誉教授。専門は、仏教学、宗教哲学。唯識思想研究で博士（文学）。主な著書に、『〈宗教〉の核心――西田幾多郎と鈴木大拙に学ぶ』、『ブッディスト・エコロジー』他多数。

世界平和祈りの式典

Ceremony of Prayer for World Peace

8月4日(木)
比叡山上

比叡山上での受付と式典会場内の様子

司会は山田歌実行委員会式典部長がつとめた

世界平和祈りの式典

CEREMONY OF PRAYER FOR WORLD PEACE

8月4日(木)
比叡山上

開式挨拶を述べる國富敬二実行委員会副委員長

「宗教者は、常に弱者の側に
立つことを心がけねばならない」
——比叡山メッセージ——

1987年開催の比叡山宗教サミット「世界宗教者平和の祈りの集い」において採択された
「比叡山メッセージ」をリレー朗読する6名の次世代を担う諸宗教の代表者

世界平和祈りの式典

Ceremony of Prayer for World Peace

8月4日(木)
比叡山上

15時30分の「平和の鐘」鐘打にあわせて平和を願い参加者一同で祈りを捧げる

「こころを一つに平和を祈る」

世界平和祈りの式典

Ceremony of Prayer for World Peace

8月4日(木)
比叡山上

大樹孝啓実行委員会名誉顧問による主催者代表挨拶

主催者代表挨拶の後、突然の天候悪化を受け式典を一時中断。避難する参加者

世界平和祈りの式典

Ceremony of Prayer for World Peace

8月4日(木)
比叡山上

予定を繰り上げての式典終了について説明する阿部昌宏実行委員会委員長

閉式に伴い改めて平和を願い黙祷が捧げられた

記者会見 PRESS CONFERENCE

8月4日(木)

式典終了後に行われた記者会見

「今、太平洋地域が直面している異常気象は
すぐに皆さんが直面する問題です」

世界へ警鐘を鳴らすバグワン師

比叡山宗教サミット35周年記念

世界宗教者平和の祈りの集い

開催日：２０２２（令和４）年８月４日（木）
場　所：国立京都国際会館／比叡山上
主　催：比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」実行委員会

THE INTERRELIGIOUS GATHERING OF PRAYER FOR WORLD PEACE

比叡山宗教サミット35周年記念
世界宗教者平和の祈りの集い

目次

フォトギャラリー……2
発刊にあたって……20
開催趣意書……22
比叡山メッセージ2022……24
日程……26
開会式
開会挨拶……実行委員会委員長／天台宗宗務総長　阿部昌宏　30
平和のメッセージ……ローマ教皇　フランシスコ聖下　32
記念講演……一般財団法人日本総合研究所会長／多摩大学学長　寺島実郎　34
「歴史的大転換期における宗教――心の回復力（レジリエンス）を求めて」
シンポジウム　テーマ＝気候変動と宗教者の責務……46

（敬称略）

世界平和祈りの式典

教宗派・団体代表登壇者 …… 67

開式挨拶 …… 実行委員会副委員長／立正佼成会理事長　國富敬二 68

主催者代表挨拶 …… 実行委員会名誉顧問／天台座主　大樹孝啓 70

聖エジディオ共同体代表挨拶
アジア地域担当部長　アゴスティーノ・ジョバニョーリ 72

比叡山メッセージ朗読 …… 74

資料

実行委員会組織図 …… 76

実行委員会名誉顧問・顧問名簿 …… 77

実行委員会名簿 …… 78

実行委員会経過報告 …… 81

新聞報道記事 …… 82

あとがき …… 92

※本誌中、記載の役職・氏名は2022年8月4日当時のものです

THE INTERRELIGIOUS GATHERING OF PRAYER FOR WORLD PEACE

CONTENTS

発刊にあたって

神仏のご加護と関係者各位の温かいご支援により、比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」は多くの成果を収めることができました。

この35周年が盛会裡に幕を閉じることができましたのは、日本宗教連盟協賛の５団体である教派神道連合会、全日本仏教会、日本キリスト教連合会、神社本庁、新日本宗教団体連合会および世界宗教者平和会議日本委員会、世界連邦日本宗教委員会、ならびに日本ムスリム協会の甚大なるご協賛とご協力、事務局の方々の献身的なご尽力によるものであります。衷心より御礼申し上げます。

さて、１９８７年に比叡山宗教サミット「世界宗教者平和の祈りの集い」が初めて開催されて以降も、世界各地では大小問わず軍事的な衝突が跡を絶ちませんでした。一方で、地球温暖化の危機が増している状況にもありました。加えて、新型コロナウイルスのパンデミックという現代人が経験したことがない災禍が不安感を煽り、感染者やその家族への差別、国家間によるワクチンの争奪など新たな分断線が引かれ始めました。有史以来、人びとの精神的支柱となってきた宗教界への期待、そして私たち宗教者の責務は近年より一層増しているように感じます。

更にはロシアによるウクライナへの武力侵攻によって世界中の人びとの世界平和への関心が高まったといえましょう。

そのような状況下において、比叡山宗教サミットは35周年を迎えました。大きな節目時には、国内外の宗教者が対話を重ね、いかに行動すべきかを模索し、常に反省しながら世界の人びとに平和への指針を発信してまいりました。

今回の集いでは、宗教者が責任をもって行動する大切な時期に来ていることを自覚するとともに、多くの人びとに実践を呼び掛けるべく「気候変動と宗教者の責務」を大会テーマといたしました。

実際、午後に行った比叡山上での式典では、途中より激しい風雨と落雷に見舞われ、自然界からの警告を目の当たりにしたのです。これを気候変動や環境問題に取り組む私たちへの神仏からの激励と受け止め、宗教者として叡智をもって対処せねばならないとの自覚を新たにした次第です。まさに記憶に残る比叡山宗教サミット35周年記念の集いとなりました。

最後に、今回お世話になった皆さま、また遠路ご参加いただいた皆さまに心より御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」
実行委員会委員長 天台宗宗務総長 **阿部昌宏**

開催趣意書

テーマ 気候変動と宗教者の責務

１９８７年８月、世界の宗教指導者は比叡山上に集い、比叡山宗教サミット「世界宗教者平和の祈りの集い」を開催しました。そして宗教の違いを超えて、平和のために真摯な祈りを捧げ、さらに全世界にメッセージを発信し、宗教者は平和のために働くと共に、常に弱者の側に立つことを誓いました。

さて、科学技術の飛躍的な進展は、人類に多くの恵みをもたらした反面、その成果を無分別に取り入れた結果、容易ならざる事態がこの地球上に生じることとなりました。それは気候変動の問題であります。

過度な大量生産大量消費は環境破壊を誘発し、地球の未来に黄信号を点すに至りました。CO_2の過剰な排出は地球温暖化を招き、各方面に悪影響を及ぼしているのです。すなわち異常気象、酸性雨、森林の減少、海洋汚染、生態系などの異変であります。かつて温暖化については、自然現象によるものなど議論の余地もありましたが、近年自然に対するつつしみと畏敬の念をおろそかにしてきた人間の営為によるものであることが科学的にも証明されました。そこで今日はCO_2排出削減問題が、人類の最大の課題となっています。

一方では現在世界中の人々が、コロナウイルスのパンデミックに苦しんでいます。この問題の解決には、情報の共有、ワクチンの適正分配、医療体制の充実が急務であることはいうまでもありません。しかし現今の国際社会は、ワクチンの供給問題などに格差や分断の状況が色濃く反映しているのが実状です。その結果人類がせっかく手に入れた知見は生かし切れない皮肉な現実があります。

今日まで科学技術の進歩を人類の発展と同義語に受け留めてきた人間は、その過程で欲望の肥大化が自らを滅ぼす凶器になりつつあることに、もっと敏感であるべきでありましょう。そして改めて人類の未来を明るいものにするには自制心をはぐくみ、分かち合うことの大切さを再認識すべき時にきています。

２０２２年8月は比叡山宗教サミット35周年を迎えます。現今の世界では実に沢山の問題に人類は直面しています。さらに厳しい国際情勢の中ではありますが、本年の宗教サミットでは気候変動問題を中心にとり上げ、宗教者の果たすべき役割について叡智を結集し、実践への道を切り開いて行きたいと考えます。祈りと対話を原点として、平和のために歩んできたわれわれの営みを、少しでも未来に繋げていこうではありませんか。

比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」　実行委員会

比叡山メッセージ２０２２

２０２２年８月４日、比叡山宗教サミット35周年を記念して比叡山上に集ったわれわれは、平和な世界の実現と人々の安らかな暮らしを願って真摯な祈りを捧げると共に、世界の人々に心からのメッセージを贈りたいと思う。

１９８６年にイタリア・アッシジで開かれた「世界平和祈願の日」の精神は、翌１９８７年われわれを比叡山宗教サミット「世界宗教者平和の祈りの集い」の開催に導いた。そして世界平和への願いは、如何なる宗教にとっても根本的であるとの認識に立ち、「正義と慈悲」を通じて平和の希求を訴え、同時に「宗教者は常に弱者の側に立つことを心がけねばならない」ことを再確認した。

それから35年を経た今日、多くの人々が願ってきたにもかかわらずわれわれを取り巻く状況は、実に厳しい問題に直面しているといわざるを得ない。それは深刻な地球温暖化である。この問題はすでに避けて通れないどころか、このまま放置しておけば人類はもとより、生物の生存そのものを許さない状態になることが科学的にも証明され、これからの10年の対策が地球に決定的な影響を及ぼすことが明らかにされたのである。

その結果、昨年10月英国のグラスゴーで開催されたＣＯＰ26（国連気候変動枠組条約第26回締約国会議）で、難航の末ようやく世界の平均気温の上昇を産業革命以前より1.5度以内に抑えることが合意された。この数値目標の達成には相当な困難が予想されるが、現実に近年世界各地で起こる豪雨災害や熱波による森林火災、さらに島嶼地域の大規模な浸水など深刻な被害が伝えられ、すでに看過は許されない状態となっている。

地球環境の問題は、先進国はもちろん発展途上国も含め国際協力がなければその改善は期待できない。すなわち諸国家の意思の中にあるという意味で、われわれは各国や国際機関の指導者に一般の人々の切実な声を伝え、より一層強くリーダーシップを発揮するよう働きかけねばならない。一方、環境問題には万人に共通の責任があることを知らなければならない。それは日々の生活の中で無数の小さな行為の積み重ねによって、問題が現実のものとなっていくことである。未だに「私一人ぐらい何をしても、たいした影響を及ぼさない」と考える人が少

なくない。しかしそれらの行為の無数の集積が、結果的に大きな影響を与えるのである。すなわち個人は単なる個人に留まらない存在であることの自覚が要請されてくるのである。人間は一人では生きられないことは自明の理ではあるが、生きていること自体が多くの連関の中に支えられていることでもある。そう考えるとき、生きていくことには「自他共に」のみならず「それを取り巻く環境と共に」円滑に生きていくという倫理的な使命があることに気がつく。それは取りも直さず神仏の叡智に生きることでもある。そこでわれわれ宗教者は改めて多くの人々と共に、「よりよく生きるとは何か」について考え、従来の経済成長型のライフスタイルから、環境重視型（共生型）への生き方のほうが、より人間らしい生き方であるという意識の変革に努めて行くべきであろう。その意味で宗教者の果たすべき役割は大きく、その責務は大変重いものがあると自覚するものである。

この環境重視型のライフスタイルは、今もなお猛威を振るうコロナ禍においても、きわめて有効な手段を発揮する基礎となり得ている。さらなる情報公開や国際支援が求められるところである。

最後に、今回の「世界宗教者平和の祈りの集い」の半年前より始まったロシアのウクライナ侵攻に対して、断固たる抗議をする。東西の冷戦という核の脅威の極限を味わった人類は、その悲惨な結末を回避して共存の道を歩む方向に舵を切ったはずであった。それにもかかわらず再び核の使用をちらつかせてまで政治的野心を遂げようとする大国が現われたことに国際社会は驚愕させられた。世界の紛争を調停する国連常任理事国であるロシアによる今回の国際法を無視した暴挙は、全く容認することはできない。

ロシアに対してウクライナからの即時撤退を強く求めるものである。何としても軍事行動を即座に中止して対話への道筋を開くべく、国連常任理事国はじめ関係国は今こそ知恵を凝らすべきであることを、声を大にして訴える。さらに戦争は人間による最大の環境破壊の行動であることを心に刻むべきであろう。

２０２２年８月４日

比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」　参加者一同

日程

2022年8月4日(木)

開　会　式　　於 国立京都国際会館

時　間	日　程	内　容
8：30	開場・受付	
10：00	開会式典	開会の辞　実行委員会総務部長　和多善秀 来賓代表・主催者代表・海外招請者 登壇 開会挨拶　実行委員会委員長　阿部昌宏 ローマ教皇より平和のメッセージ 代読　ローマ教皇庁駐日特命全権大使　レオ・ボッカルディ大司教
10：25	記念講演	講演者　一般財団法人日本総合研究所会長・多摩大学学長 寺 島 実 郎　氏 「歴史的大転換期における宗教―心の回復力(レジリエンス)を求めて」
11：15	シンポジウム	テーマ：気候変動と宗教者の責務 パネリスト 秩父神社宮司 薗田　稔　師 太平洋教会協議会事務総長 ジェームズ・バグワン　師 東洋大学名誉教授 竹村　牧男　氏 アジア宗教者平和会議実務議長 デスモンド・カーヒル　氏 コーディネーター 実行委員 和田惠久巳
12：35	閉会	閉会の辞　実行委員会総務部長　和多善秀

世界平和祈りの式典　於 比叡山上

時　間	日　程	内　容
15：00	世界平和祈りの式典	開式の辞　実行委員会式典部長　山田　歌
		開式挨拶　実行委員会副委員長　國富敬二
		比叡山メッセージ朗読
15：30		平和の鐘 鐘打・平和の祈り（黙祷）
		主催者代表挨拶　実行委員会名誉顧問　大樹孝啓

〈以降のプログラムは予定を繰り上げて終了したため実施いたしませんでした〉

宗教別の祈り

①教派神道代表祈り

②仏教代表祈り

③キリスト教代表祈り

④神道代表祈り

⑤新日本宗教団体連合会代表祈り

⑥イスラーム代表祈り

聖エジディオ共同体代表挨拶

聖エジディオ共同体アジア地域担当部長
アゴスティーノ・ジョバニョーリ　氏

比叡山メッセージ2022発表　実行委員会名誉顧問　宍野史生

閉式挨拶　実行委員　水尾寂芳

閉式の辞　実行委員会式典部長　山田　歌

※激しい雷と風雨を伴う突然の天候悪化を受け、参加者の安全を最優先し、主催者代表挨拶をもって予定を繰り上げ、式典を終了いたしました。

比叡山宗教サミット35周年記念

世界宗教者平和の祈りの集い

■開会挨拶
阿部昌宏（実行委員会委員長／天台宗宗務総長）

■平和のメッセージ
ローマ教皇フランシスコ聖下

■記念講演
寺島実郎（一般財団法人日本総合研究所会長／多摩大学学長）

■シンポジウム
パネリスト
薗田　稔（秩父神社宮司）
ジェームズ・バグワン（太平洋教会協議会事務総長）
竹村牧男（東洋大学名誉教授）
デスモンド・カーヒル（アジア宗教者平和会議実務議長）
コーディネーター
和田惠久巳（実行委員）

（敬称略）

開会挨拶

神仏のご加護と関係者各位のご尽力により、比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が開催できますことを実行委員会委員長として心より厚く御礼申し上げます。

皆様と共に世界平和実現の祈りと対話を始めましてから、はや35周年を迎えます。

この比叡山宗教サミット「世界宗教者平和の祈りの集い」が、１９８７年に開催されて以来、その精神を受け継ぐ私たちは、10年毎に日本宗教代表者会議を組織し、５年毎には実行委員会によって開催されてまいりました。文字通り日本の宗教界の総力を挙げて取り組んできた次第です。海外からも多くの宗教者が参加され、宗教宗派を越えた平和を希求する対話と祈りが捧げられ、世界にメッセージが発信されてきたのであります。

30周年記念大会で、私たちは「差別や不公正を許さない社会の実現のために、宗教者にもその責任があることを胸に刻み、われわれは市民社会と強力な連帯を構築していくことを決意する」と全世界に向けてメッセージを発しました。

しかしながら、この5年の間にも憎悪と報復の連鎖はやむことなく、世界では戦争やテロの嵐が吹き荒れ

ています。またコロナ禍という新たな試練が私たちを襲い、「見えない恐怖」との戦いを強いられています。人類に新たな課題や分断を生み出し、まさに無明の闇に覆われた日々を過ごしてまいりました。

更に、悪化の一途をたどる地球温暖化や、環境破壊についても警鐘を鳴らし、一人ひとりの自覚の覚醒と行動を強く促すことを誓い合いましたが、異常気象による災害は後を絶たず、残念ながら自然の脅威を目の当たりにする機会が増加傾向にあります。地球は危機に瀕しているといっても過言ではありません。これらの原因は、人間の飽くなき欲望がもたらした結果であり、神仏からの警告と受け止めるべきでしょう。この現状を謙虚に受け止め、「気候変動と宗教者の責務」をテーマに記念講演やシンポジウムから提言を賜ると同時に、解決方法を模索する機会にしたいと考えております。そして私たち宗教者が率先して実践し、この成果を世界に発信してまいります。

私ども宗教者は、対話による相互理解を深め、共に祈り、世界平和を希求し続けてまいりました。そして「宗教者は常に弱者の側に立つことを心掛けねばならない」との初回時のメッセージを今一度思い起こし、全人類が平和の恩恵に浴するために祈りを捧げたいと存じます。

今回の比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」に尽力されたすべての人々に感謝を申し上げます。

比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」

実行委員会委員長 天台宗宗務総長 **阿部昌宏**

平和のメッセージ――ローマ教皇フランシスコ聖下より

このたび、比叡山宗教サミット「世界宗教者平和の祈りの集い」は35周年記念式典の開催を迎えます。ここにローマ教皇フランシスコ聖下の名の下にご関係者皆様方、そしてご参会のあらゆる宗教の代表者ご一同様に、心を込めてご挨拶ができますことは、誠に嬉しい限りでございます。効果的かつ具体的な歩みを進めるため、気候変動を危惧する宗教指導者の皆様方が捧げる祈りに、私自身もご一緒させていただきます。そして、このメッセージをローマ教皇庁駐日特命全権大使であるレオ・ボッカルディ大司教より皆様にお伝え申し上げます。

諸宗教の指導者が世界平和のため、世界中からイタリアのアッシジに集い、共に祈られた１９８６年10月27日以来、「アッシジの精神」を継承し、伝え広める皆様のご献身は、この祈りの集いへの参加という形で明らかに示されております。聖ヨハネ・パウロ二世教皇による崇高で歴史的な呼びかけに感銘を受けられ、皆様が築いてこられた比叡山宗教サミットの伝統はこの35年間に亘り比叡山に集結し、共通した課題を見極めその問題点を人々に呼びかけていくという、宗教者の任務を繰り返し伝えくださっております。

この集いにおいて「気候変動と宗教者の責務」を熟慮なさる中、私たちは気候変動の悪影響に脅かされているひとつの家に、共に住まう家族の一員であるという認識を新たにし、強化していく使命を授かっていることに気づかされることでしょう。方法は違えども、各々の宗教信念と精神的伝統は、配慮と責任の文化を築き育むための力を人々に提供しております。その信念と伝統に感動し、そして導かれて（「信仰と科学：ＣＯＰ26に向けて」でフランシスコ教皇が述べられた通り～２０２１年10月４日ローマにて～）現在私たち

が体験しております「前代未聞の生態系危機と価値観の危機」に対して、共に有効な対応を提供することが可能であり、またその中から、将来の世代へ具体的な望みを与えることができるのです。

ローマ教皇フランシスコ聖下が私たちに気づかせてくださいました通り、現在の生態系危機は、ある人々の無抑制な欲望と、人間と環境の間に存在すべき誓約にそぐわない不健康な開発モデルから生じた価値観の危機による結果であります。しかしながら、宗教の伝統により促された物事の手本と世界観は、生態系転換を奨励し、現在の生態系危機を導いた紛争の種を阻止する可能性を秘めております。それは、長い視野を持って歴史を見つめ、超越的な目標に向かって進むその姿にあります。これに関しまして、欲望と消費主義の執念から解放された中で、真なる人類の発展を育み、個々として深い喜びが可能な社会を形成し「寛大な配慮と優しさに満ちた精神を共に育成していく姿勢」を養っていくためにも、宗教指導者はより大きな形で、それぞれの精神面の豊かな遺産を奨励する責任を担っているのです。（教皇回勅『ラウダート・シ』２２０より）

最後に申し上げたいことは、環境に対する配慮は人に対する配慮に比例して成長していかなければならないという点です。より適切で持続可能な環境再生の形態と行程への復帰は、人々の精神を高揚させることでしょう。

「私たちの世界を保護し改善するすべての努力は〝生活スタイル、生産消費形態、そして今日社会を治めている力〟組織の中で必然的に甚大な変化を促すことになります。明らかに、真の人類の発展は道徳的性質を有しております。それは、人々への完全な尊敬を予期する内容ですが、私たちの周りの世界に対しても尊敬の配慮を伴った内容でなければいけないのです。」（教皇回勅『ラウダート・シ』５より）

新たな祈りの約束を込めて、皆様へ神仏から多くのご加護がありますことを、ご祈念申し上げます。

２０２２年7月24日　バチカンにて

記念講演 MEMORIAL LECTURE

歴史的大転換期における宗教――心の回復力（レジリエンス）を求めて

一般財団法人日本総合研究所会長／多摩大学学長　寺島実郎氏

私自身は、宗教者でもなければ宗教学者でもありません。俗世間といいますか、ビジネスの世界で40年ほど生きてきました。現在は、国際政治学、経済学、経営学などアカデミズムの世界でも論考を続けている、そういう立場におります。

今回こういうかたちで、人間の心のレジリエンスを真剣に考えておられる世界の宗教者の皆さんに、役不足ながら私の問題意識を伝えるという大変名誉ある機会をいただいたという思いで参上しています。

私自身、ビジネスの世界を中心に世界１００ヵ国近くの国々を訪ねてきました。特に中東では、中東一神教のユダヤ教、キリスト教、イスラム教など、世界の宗教の中心にいるような、人々を支えている宗教聖地にも、何度となく立ってきました。イスラエルで、あるいはサウジアラビアで、さらにインドで仏教の聖地といわれるところにも立ってきました。

また米国には10年以上生活してきていますし、イギリス・ロンドンでの生活も含めて欧州では、毎週日曜日に教会に行くという情熱に支えられた人たちと、ビジネスの現場でも向き合ってきました。戦後日本の、宗教なき時代を生きたビジネスマンとして、また経済優先社会をフロントラインで生きてきた人間として、世界の宗教の熱量に衝撃を受けたものです。宗教が時代と世界を動かしている、そういう思いを深めてきました。

昨年末、結局20年以上かかってしまいましたが、『人間と宗教あるいは日本人の心の基軸』という著書を岩波書店から出版しました。今回この延暦寺の、日本仏教の母なる山といわれる比叡山に包まれたこの場所において、私なりのものの見方を皆さんにご紹介し、今回の比叡山宗教サミットの願いである地球環境問題も含めて、多少なりとも何かを考えるヒントにしていただければ、大変ありがたいと思っています。

先ほどローマ教皇のメッセージのなかに、ワンヒューマンソサエティ、ワンヒューマンファミリーという言葉が登場しました。われわれは一つの人間のファミリーのなかにいる、という問題意識がボトムラインだと思います。

私の話にそって4枚のパネルを用意しています。まず1枚目のパネルをご覧いただき、考えを巡らしていただきたいと思います。われわれを含め21世紀を生きるすべての人間が、今どういう

状況におかれているのかという基本認識にかかわる問題です。

チンパンジーと人工知能があり、中心にレオナルド・ダ・ヴィンチの人間〝ヒューマン〟でこの図柄が成り立っています。今われわれは、動物からも人工知能からも、「人間とは一体何なのだ」と問い詰められているといっていいだろうと思います。

まず、チンパンジーからの問いかけということですが、21世紀に入って科学技術の進化が急速な勢いで進んでいます。私は社会科学の世界にいる人間なのですが、自然科学の分野でも生命科学の進化あるいは動物行動学の進化に関するものを、食い入るように読んでいますが、実は衝撃を受けていることがあります。

２００３年にヒトゲノムの解読が終わりました。人間のＤＮＡの解析がすべて終わりました。チンパンジーと人間のＤＮＡの差は、わずか1・2％だということが分かったというわけです。個体差を除くと、1・06％というのが正しいということも、最近付け加わってきています。

われわれ人間は少なくとも、自分はサルよりはましだろう、チンパンジーよりはましだろうと思っていますが、実はそうでもないようです。動物としての能力を個別にチェックすると、人間よりも優れた能力をもった動物はいくらでもいるそうです。

またわれわれは近代社会を生きています。近代社会は、人間中心主義という言葉としての響きはいいのですが、人間が生命動物のなかで最も優れている、という錯覚のなかで築き上げてきた文明だともいえます。

その1・2％の差は何かというと、最近の分析で次第にわかってきたのですが、言語やコミュニケーションなど、あとでお話しする意識の差であったようです。日本語で「やばい」という表現がありますが、よく考えていただくと、人間は他の動物に比べて極めて危険な動物です。なぜなら、民族の違いや宗教の違いやイデオロギーの違いを理由にして、同種族である人を簡単に殺してしまう。そういうことができる動物というのは人間しかいないといわれています。

動物行動学の分野では、京都大学が最前線の研究を進めておられます。元総長の山極壽一先生が、人間と動物の決定的な違いは何かということについて、いろいろな説を述べられています。私に響くのは、パネルに書いてある、共感力を持つ動物ということです。目の前にある相手や出来事に対してシンパシー、共感する力を持っている動物としての人間が、動物のなかでも際立った特色だということです。本当にそうだなと思う体験を現場でしてきたといっていいと思います。

さらにもう一つ、今度は反対側からの視点です。

人工知能の進化というのは、皆さんご自身がヒシヒシと感じているだろうと思います。要するにＡＩです。シンギュラリティの議論というのが迫ってきています。いよいよコンピューター、

つまり人工知能が、人間の能力を超えるタイミングが迫っているというのです。当初は２０４５年だといわれたのですが、どうも10年くらいは早まるのではないかというのが、最近の研究の進化のなかでいわれ始めています。

ＡＩと人間の違いは何か。ＡＩが人間の能力を超えていくとは、一体何かということを確認しておきたいと思います。これが宗教と深くかかわるからです。

人間の心の動き、智の動きというものを象徴するキーワードとして、「認識」と「意識」というパネルに書いた言葉をかみしめたいと思います。

認識は英語でいうとレコグナイズする力です。そして意識はコンシャスネスです。認識と意識とはどう違うか。認識というのは、学習を通じて記憶しその判断力のもとに、わかりやすくいうと「目的手段合理性」ということですが、目的に対して最適の手段を選ぶという、智の活動が認識力です。

この認識ということにおいて、競い合ったならば、まもなく、あるいはもうすでにかもしれませんが、人間はコンピューターに追い抜かれます。例えば囲碁でも将棋でも、ディープラーニングという手法を通じて、何万何百万という対局の棋譜を吸収したＡＩは、どんなに能力が優れている人間でも追い抜いていくだろうということだけは間違いありません。目的に対する手段を合理的に選ぶ力としての認識力において、コンピューター（ＡＩ）が人間を凌いでいく時代を、われわれが目にすることになるだろうと思います。

ただし、意識という言葉の意味をかみしめる必要があると思います。人間の力のなかで大変重要なのが、このコンシャスネス（意識）だと思います。この意識についていろいろなＡＩ専門家が解説している本を読み込んだなかで、あるイタリアのＡＩ専門家の説明した話が非常に説得力を感じるので、皆さんにご紹介します。

１９６９年に人類が初めて月に立ったアポロ11号の話です。アームストロング船長ともう一人の宇宙飛行士が月面に降り立ちました。月着陸船の彼方に地球が昇るように見える、アースライズというＮＡＳＡの有名な写真があります。サンライズ、太陽が昇るのではなくて、アースライズ、つまり地球が昇ってくるという意味ですね。月面の彼方に地球が昇ってきたというわけです。二人の宇宙飛行士は、宇宙船の彼方に地球が昇ってきたのを振り返りました。

認識力を深めるために、センサーという科学技術が存在します。太陽はどう動いているのか、地球は今どう動いているのか、センサーの能力というのは認識力を高めていきます。

しかし、二人の宇宙飛行士は書き残していますが、月面の彼方に地球が昇ってきたとき、互いに顔を見つめあい、地球を見つめて涙が出たというのです。コンピューターは絶対、涙は出ません。二人は故郷地球に残してきた親兄弟、恋人、友達を思い出し

て、しかもこんな遠くまできたという感慨で涙が出たのです。ここに意識の力というものが象徴されています。

つまり、目的に対する最適手段を考えるだけが意識ではないのです。どんなにAIが発展したとしても、絶対に超えられないことは何かというと、人間が人間としてもつ、この意識の力だといわれ始めています。というのは、美意識という言葉がありますが、冷静客観的に目的に対する手段を考えたとき、人間は妥当とは思えないことでも行動を起こすことがあります。

例えば、溺れている子どもがそこにいるとします。自分が泳げるかどうかということを問いかける前に飛び込んでしまうことがあります。恋人のためなら、あるいは子どものためなら命を賭けても構わない。計算に合わないだろうと思っても、利害打算を超えて踏み込んでいく情念のようなものが、人間の心のなかに働くことがあります。それがある意味で、人間の人間たるゆえんではないかということに気づかされます。

今、21世紀を生きるわれわれは、職業においても何においても、人工知能の発達ということに突き上げられてきています。人間の意識の深さ、あとでそのお話につながっていくことに気づいていただけると思いますが、宗教はレコグナイズする力ではない、コンシャスネス、意識なのです。

私は世界の偉大な宗教者の人たち、あまり知られてはいないですが現地で一生懸命、宗教活動にあたっている人たちと向き合ってきた経験があります。これらの人たちに通じるものは、この意識の深さ、人間としての心の大きさです。私はそのことを何度となく感じてきました。

次に、宗教というものについて、もう一歩踏み込んで考えようというのが2枚目のパネルです。

人類史における宗教の淵源についてです。これは宗教者の皆さんも、生命科学の進化、文化人類学の進化、認知科学の進化ということに関心を持っておられる方なら、嫌でも目を向けざるを得ないことだと思います。

そもそも人類にとって「宗教とは何だったのか」ということについて、考えざるを得ません。そこでまず、そういう説もあるという話ではなくて、すでに科学的に検証されている事実について考えていきます。

ホモ・サピエンス、われわれのご先祖である新生人類がアフリカ大陸に現れたのは約20万年前らしいということが分かってきています。その後、約6万年前にご存知の「グレートジャーニー」というものが始まります。つまりユーラシア大陸の側にアフリカ大陸から動き始めたという、「出アフリカ」についてです。

なぜ動いたのかということについては、さまざまな説が出てきており、私は本当に刺激を受けています。その時代の感染症が影響してアフリカから出たという感染症説、あるいは食を求めた

人類史における宗教の淵源

生命科学、文化人類学、認知科学から見えてきたこと

● **約６万年前：ホモ・サピエンスの出アフリカ（グレート・ジャーニー）**

● **約１万年前：定住革命　…農耕革命：気に入らない人とも共存**

- 約7,000年前　概念的「神」…神々との対話で生きる人類
- 約3,000年前　人間としての「意識」の芽生え

● **約2,500年前：世界宗教の誕生**

- 中東一神教の基点 ユダヤ教　…「モーゼ五書」など旧約聖書の整備
  →約2,000年前　イエスの死
- インド ブッダ（BC463～383）
- 中国 儒教の祖 孔子（BC551～479）

人間の意識の高まりの結晶としての宗教

◆自らを見つめる力（内省力と共感力）
◆より大きな価値が自分を見つめていることを意識

という説、さらには気候変動が大きな背景にありユーラシア大陸に入り込んだという説もあります。このあたりはこれからますます検証されていくだろうと思います。

日本列島にはホモ・サピエンスが約３万８０００年前にたどり着いただろうといわれています。そこで、ここからが宗教という問題意識と絡んできます。

それまで人類は狩猟採集の時代を続けてきたのですが、約１万年前に定住革命、すなわち一定の土地に定住する農耕革命がおこります。毎年、毎年、農耕というものに向き合って定住生活をしていくスタイルに変わったのが約１万年前だろうといわれ、今さまざまな検証が進んでいます。母なる大地に根ざし始めたのです。

農耕革命についてはさまざまな文献が出てきていますが、定住したことの意味を平たくいうと、気に入らない人とも共存せざるを得なくなったということでもあります。それまでは渡り鳥のように、その場でもめごとが起きたり嫌なことがあったりすると、次の場所に移動していくという世界観によって生きていればよかったのですが、人間が、一定のところに住んでコミュニティを保って一緒に住んでいくということになりますと、本音のところでは気に入らない人だと思っていても、腹をくくって一緒に生きていかなければならなくなりました。そのなかから、生きていくための知恵、自分だけではなく誰かと一緒に生きる、例えば環境に適応して生きるルールやしきたり、他者に対する配慮、そうい

うものがコミュニティのなかでどうしても必要になってきます。約1万年前にその定住革命が動き始めたわけです。

最近こういう研究文献が続々と出てきていますが、約７０００年前に人間が概念的な神を意識し始めたといわれています。聖なるものを意識するなかからの神の存在です。約３０００年前までの人間は、今の人間よりもはるかに感受性が優れていたのではないかという捉え方が、最近の研究で発表され始めています。

神々を意識し神々との対話のなかで生きる、例えば巫女さんのサジェスチョンによって生きていく、ここはどうしたらいいのか判断に迷うときに神に訊ねるなど、さまざまな神々との対話で生きてきた人類の心のなかに、３０００年ほど前から意識というものが芽生えてきたのではないか、という先端的な研究が登場しています。

そこで、２５００年前とパネルに書かれている部分をよく考えいただきたいと思います。今、われわれが世界宗教というカテゴリーのなかで議論しているもの、それは何かというと、民族、国境を越えて広く世界に浸透している宗教、という意味なのです。

世界宗教といわれるものの誕生は実に不思議です。２５００年くらい前に集中しています。例えば中東一神教の基点であるユダヤ教は、「モーゼ五書」なる旧約聖書の整備を始めたのが約２５００年前。そして約２０００年前にジーザス・クライストがユダヤ教のなかから登場してきます。インド亜大陸にブッダ、日本人が最も影響を受けている釈尊が登場してきました。釈尊の生きた時代というのはＢＣ４６３～３８３年と書いていますが約２５００年前です。儒教は世界宗教とはいえませんが、日本人が大きな影響を受けた儒教の祖である孔子が中国で生まれたのも、やはり約２５００年前です。

この２５００年前とは一体何かということが大きなテーマになっています。世界宗教の淵源といわれるものが、どうして世界の各地でほぼ同時に動き始めたのかということについての研究は、最近非常に注目を浴び始めています。

もうひとつ、ちょっと不思議なことを申し上げます。ギリシャの民主制がピークを迎え黄金期といわれたのが、約２５００年前のアテネの民主制です。ですからアテネの民主制と、世界宗教の誕生はほぼ同時期の発祥です。つまり人間というものが持っている思考回路、意識、認識、そういう智の世界における変化が、大きなうねりを持って動き始めた時期が同時化してきたのだと思います。

次に、人間の意識の高まりの結晶としての宗教についてです。宗教というのは、あらゆる宗教を超えてといっていいと思いますが、本当の宗教という言葉をあえて使いますが、自らを見つめる力の強さです。ブッダの仏教は究極の内省力です。自分の苦悩を真剣に見つめ、そのなかから生まれてきたものです。内省力と共

感力のなかから、宗教の心というものが静かに動いてきているということを私は感じます。

なによりも、宗教者の持っている心の大きさとは何でしょうか。私は多くの人とのふれあいのなかで思い出すのですが、より大きな価値が自分を見つめているという意識です。つまり傲慢不遜に生きることの限界、謙虚という言葉がありますが、自分より大きな力やより大きな意思、それが神仏なのかもしれませんが、自分を見つめる大きな力があるということに謙虚であるという意識が、宗教というものをもって真剣に生きている人たちに共通する価値だということを感じています。

次に、２５００年前に静かに動き始めた民族、国境を越えた世界宗教なるものに、何か共通性はあるかということを考えます。キリスト教における愛、仏教における慈悲を突きつめていくと、人間の心のなかの利他性に気づきます。アイ・マイ・ミー、つまり自分、自分、自分ではなく、他者に対する思い、あるいはあるべき価値に対するまなざし、そういうものに対して気持ち、心が向かい始めたということが、人類史における宗教の淵源ではないかと、この段階で私が確認しておきたいことなのです。

３枚目のパネルです。世界宗教は歴史のなかで、「加上」そして「進化」と書いてあることについての話です。宗教者ではない人間の、社会科学的な関心領域からの宗教論だと思って聞いてい

世界宗教は歴史の中で「加上」、そして「進化」

キリスト教　：原罪を背負ったイエスの高潔な死とパウロの役割

「神はユダヤ人の神でしかないのか」　→普遍的な神の誕生

・宗教改革の緊張を背景に大航海時代、近代化への動き

↓ カトリックによる対抗宗教革命

↓ 1648年三十年戦争後の主権国家体と英国立憲政治

仏　教

・ブッダの仏教（究極の内省）を基軸に、衆生救済へと大乗仏教が「加上」

・日本仏教の創造性

最澄、空海、法然、親鸞、日蓮、道元、栄西

…「母なる山」比叡山848m　「一隅を照らすもの国の宝なり」

ただきたいと思います。

キリスト教についていいますと、私はゴルゴダの丘に2回立ちました。キリストが十字架を背負って歩かされたという道を2回、歩いたことがあります。そして、キリスト教の原点ともいえるゴルゴダの丘の上に建つ聖墳墓教会に立ち、思いを巡らしたことがあります。

「キリスト教はパウロが作った」という言葉があります。キリストという青年の高潔な死は人類の原罪を背負って死んだものであり、そのキリストの死がキリスト教を支えているということはいうまでもありません。このキリストという人物に実際は一度も会ったことのなかったパウロという人が、キリストをしてキリストにした、キリストとはギリシャ語ですが、このパウロの役割こそが、キリスト教が今日担っている大きなパラダイム転換のキーポイントだったということに気がつきます。

神はユダヤ教の神でしかないのか、ユダヤ人のための神でしかないのかというパウロの問いかけ、民族を超え、性別を超え、階級階層を超え、神は万人のものではないのかという問いかけから、キリスト教のパラダイム転換が起こったということです。普遍的な神の存在という問題意識を展開して、その原点に立っていたのがパウロだったということを、文献を読んできてつくづく思います。

キリスト教というのは、キリストなる生き方をした人物そのものの上に、パウロという人が加上し——加える上という意味——、そのパラダイム転換がキリスト教をして世界宗教にしていったのです。

そこからさらに、ローマカトリックに対するプロテスタントの誕生へと続きますが、私が欧州を動いていて、つくづくと感じたことがあります、ローマカトリックの対抗宗教革命とそこに書いてあることの意味です。日本にザビエルがやって来た理由は、カトリックの危機感です。つまり宗教革命なるものが吹き荒れて、カトリック自身もその圧力のなかで、緊張感を持って世界に自分たちを展開していこうという思いが突き動かしたのが大航海時代であり、それが日本にまでカトリックの伝来があったことの大きな背景だろうと思います。

歴史にはわけがあるということです。われわれが生きてきた近代史なるもので、世界の政治経済学に携わっている者にとって、1648年のウエストファリア条約というのはイロハのイみたいなものです。欧州が血みどろになって戦った最後の宗教戦争といわれる30年戦争が終わり、宗教的権威から政治というものが解放されて、中世なるものから近代に歴史が動いたといわれている起点がウエストファリア条約です。そして主権国家なるものが誕生しました。

そこから、民主主義や資本主義などというわれわれがまさにどっぷり浸って生きている価値、そして社会システム、経済シス

テムが近代化という枠組みのなかで登場し、そのなかをわれわれは生きてきているといっていいだろうと思います。この西欧社会に始まった、いわゆる宗教改革を一つの梃子にして、われわれの近代という時代が扉を開いて展開してきたということをつくづく感じさせられます。

次は仏教についてです。

ブッダの仏教、先ほど申し上げましたように、ブッダの仏教について、原典に近いといわれている文献を読めば読むほど、釈尊という人はなにも衆生救済のために仏教の原点を極めたわけではない、究極の内省と書いてある意味は、まさにそこにあるわけです。人間の苦悩というものを真摯に見つめて、悟りなるものに至るまでの苦、ブッダの仏教とは内に内に向かった仏教です。

ところが、それを脈々と引き継いだ人たちが、原点に立つブッダの存在を、その時代を背景にして新しい役割意識を付加して、衆生救済の仏教、つまりわれわれが最も影響を受けている大乗仏教なるものが加上されてくるのです。

私自身、『人間と宗教あるいは日本人の心の基軸』という本で、素人ながら真剣に仏教の歴史というものを現場に立ちながら追いかけてみました。日本に伝来してきた仏教、大乗仏教の原点は、この世界におられる方にとっては常識だと思いますが、龍樹（りゅうじゅ）というインドの高僧であり、世親（せしん）ですね。さらに、われわれは仏教をお経という漢字で理解しているわけですが、あの鳩摩羅什（くまらじゅう）のような、仏教を漢字化し世界に開いた大変な存在がそこにありました。それから三蔵玄奘です。インドに行って仏教に対するわれわれの視界を開く大きな役割を果たしました。そういう人達が、仏教という宗教を加上して、創造的に進化させてきたということをつくづく思います。

さらに私は日本仏教の創造性、クリエイティビティということでお話したいと思い、パネルに書いています。この天台宗の原点におられるのが最澄です。「最澄と空海」といういい方がありますが、遣唐使の一翼を占めるかたちで、まったく同じタイミングで中国に渡りました。

私は最澄という人は大変心の広い人だったということを感じます。自分の年下で格下ともいえる存在の空海に、持ち帰ってきた真言密教のさらに深い教えを自分にも教えてくれと頭を下げる、それだけの度胸と勇気と大きさがあったということです。この大きさが最澄という人をして、すぐそこにある標高８４８ｍの比叡山を「母なる山」にならしめたのです。

日本仏教の「母なる山」という意味は、法然、親鸞、日蓮、さらには道元、栄西にしろ、ある時期このお山の懐を借りて自分を磨いています。そのなかから自分の旗を掲げて、自分の宗教というものを打ち立てました。最澄の言葉が比叡山の上に掲げられていますが、「一隅を照らす、これすなわち国宝なり」とあります。

自分の懐から、自分を超えていくかもしれないようなものを育てていく力は、どれほど偉大なものであったかということです。これはビジネスの世界でも同じです。後継者には必ず自分が安心していられるような人を選びますから、会社というのがどんどんダメになるのです。

私は高野山大学夏期講座で空海についての講義をしたとき、私の理解では空海は理科系の人、エンジニアだと述べました。中国からは真言密教だけではなく、土木工学、薬学、医学なども持ち帰りました。東寺にある綜藝種智院は、その技術を持ち帰ってきたことのシンボルマークのような存在です。また全国いたるところに空海が掘ったという井戸があります。思考回路が理科系の人で、「空海のあとに空海なき」という言葉があるくらい、完璧なロジックで物事を組み立てます。関連の書物を読んでいて感動します。

その一方で、なるほど空海は優れているかもしれないが、最澄の持つ大きさというものにしびれます、ということをその高野山の講座で申し上げたのです。参加者は驚いていましたが。

最澄のもとから法然、親鸞が仏教を徹底的に民衆の宗教に変えたということは、世界仏教史のなかでも際立っています。なぜならば、仏教は国家仏教として国家鎮護のために伝来した傾向があるなかで、そこから民衆の宗教に変えていったエネルギーの源として、やはり法然、親鸞という存在は大きいと思います。

さらに日蓮のそそり立つような、火の玉のような問題意識です。日本国をどうするかという視点から、鎌倉幕府と正面から向き合う気迫。この一群の日本仏教というものが生み出しているものは、世界宗教史のなかで光るような意味を持っています。

最後のパネルですが、宗教の偉大な可能性と恐ろしさということを、課題として確認しておきたいと思います。

一言でいうと、私は宗教というのは諸刃の剣だと思います。善悪双方のポテンシャルにとって諸刃の剣になります。今われわれは、宗教という言葉のなかに、そのことを思い知らされています。

例えばウクライナ問題です。ロシア正教という宗教がダメだという意味ではありません。真摯な民族宗教なのですが、民族宗教と国家権力が一体になったとき、合理的な判断を超えた戦争の美化と正当化の主張が起こってきます。まるで狂気の沙汰のようになって、軍事力で押さえつけようという方向に行ってしまう、そんな思いで私はウクライナを見ています。

昨今、これが果たして宗教といえるのかという問題意識を感じさせる宗教の名を使った、弱者からの収奪、あるいはマインドコントロールのような、酷い出来事にでくわしています。宗教者の方がいちばん腹を立てているだろうと思います。

しかしその一方で、私がいうまでもないことですが、対話の基盤と可能性という人間の共感力を引き出す起点、相手の立場に

宗教の偉大な可能性と恐ろしさ

● 今、直面する宗教の恐ろしさ

① 民族宗教×政治権力　→戦争の正当化・美化

② 宗教の名の下の、弱者からの収奪

● 対話の基盤と可能性

① 人間の共感力を引き出す基点として　…対話、協調、調和への力

② 宗教は「文化力」の結晶

立って共感力を持って向き合う力というのが宗教者の力です。対話、強調、調和のベースを作る上で、宗教が果たす意味です。

私は宗教というのは文化力の結晶だと思っています。つまり自らの視界を広げ、自分と相対するものに正面から向き合い、視界の重心を下げるという意味において、相手の立場に一歩踏み込んで共感する心を動かすこと。そして美や正義というものに対して意識を向ける力。私はこれが世界における宗教者の果たすべき役割だと思いますし、また現実にその役割を果たしているとも思います。

今日これから、地球環境についてもいろいろな議論が深められると思います。大きな宇宙観のなかで、あるべき秩序やあるべきルールというものを模索する心は、やはり宗教を起点にして生まれます。

私は鈴木大拙の影響を受けて、仏教に関心を持った人間です。必ず思い出すのは鈴木大拙がいい続けた、「外は広く内は深い」という言葉です。外の広がりに目をやる余裕、心をも含む内の深さを、敏感に感じ取る力を持つ心。外は広く内は深い、は英語でいうと、インテグリティだと思います。つまり、全体知です。とかく偏狭な価値観や専門性に埋没しがちな世界を、全体知をもって考えるというところへ導いていく力が宗教の役割だと思います。

わずか40分ということで要領を得ませんが、私の問題意識をお伝えして役割を終えておきたいと思います。

今日はどうもありがとうございました。

シンポジウム SYMPOSIUM

テーマ

気候変動と宗教者の責務

8月4日(木) 国立京都国際会館

◎ パネリスト

薗田　稔 師（秩父神社宮司）

ジェームズ・バグワン 師（太平洋教会協議会事務総長）

竹村牧男 氏（東洋大学名誉教授）

デスモンド・カーヒル 氏（アジア宗教者平和会議実務議長）

◎コーディネーター

和田恵久巳 実行委員

＊文中敬称略

［和田］　皆様おはようございます。実行委員の和田恵久巳と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

先ほど寺島先生は、人間、宗教について人類史をひもときながら、〝ビッグ・ヒストリー〟という広い視界を持つことの大切さを教示してくださいました。その中で人間も宗教も危険で恐ろしい存在、でも一方で宗教は共に生きるための知恵として生まれたということも教えていただきました。

ここからはそうした宗教や信仰を背景に持つパネリストの先生方と、「気候変動と宗教者の責務」をテーマに、深刻化する環境問題について理解を深めてまいりたいと思います。

まず初めに、4人のパネリストの先生方を、発表順に紹介させていただきます。

一人目は薗田稔先生です。

埼玉県にあります秩父神社の宮司を30年に亘って務めておられ、宗教学、特に日本宗教史の専門家であるとともに、社叢（しゃそう）学会や世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会においても、森づくりをはじめ環境問題に取り組んでおられます。

二人目はジェームズ・バグワン先生です。

気候変動の影響によって海面上昇の危機にさらされている太平洋島嶼国の一つ、フィジーからお越しくださいました。バグワン先生はメソジスト教会の牧師で、また18の太平洋の国や地域が加盟するキリスト教の連合体である太平洋教会協議会の事務総長をお務めです。20年に亘って気候変動問題に取り組んでおられます。

三人目は竹村牧男先生です。

仏教学、宗教哲学を専門とされ、東洋大学名誉教授でいらっしゃいます。一昨年まで同大学の学長を務めておられました。現在は世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会の平和研究所所長として、さまざまな宗教の先生方との対話を推進されていらっしゃいます。また『ブッディスト・エコロジー』という著書もあり仏教と環境を結びつけて発表されています。

そして四人目はデスモンド・カーヒル先生です。

アジア宗教者平和会議（ACRP）の実務議長に昨年就任され、諸宗教対話を指導されています。また都市社会学を専門とされ、オーストラリアのロイヤルメルボルン工科大学名誉教授でもいらっしゃいます。

それでは、さっそくパネリストの先生方にご発表をお願いしたいと思います。

霊的「生命観」の復権と「生命文明」への予感

秩父神社宮司
薗田　稔

1　混迷する「生命」観と環境破壊

かつて米国の思想家エーリッヒ・フロム（Erich Fromm, 1900–1980）が、「19世紀は神を殺し、20世紀は人を殺した」と喝破したことがある（注1）。つまり近代は、宗教が人々の信頼を失い、人類の諸問題に無力であった時代なのである。

しかしながら、現代の21世紀には、ぜひとも「人を生かし」、そのためにも「神を生かす」ことが必要である。なぜなら、今この時代が直面するすべての深刻な課題に共通する最も根源的な原因は、人間存在に根ざし、したがって人間ならではの宗教性に由来するはずの本来的に霊的 spiritual な「生命」観の喪失にあると思うからである。

たとえば、近代の世俗化した人間中心主義は、現に生きている人間だけが無条件に尊重されるべき生命をもって生きる権利をもっており、しかも個人が延命するのにあらゆる手段を講じて何の遠慮もすべきではない、という思潮なのである。あたかも自分の人生は自分だけのもので、親や親族とも無関係に気ままに生きることが当然の権利のように振舞う。だから現代では、自分たちが生き残るためには、他の生き物の命ばかりか、人間の胎児や脳死者の体躯や臓器をも自由に活用できると考えるようになる。現代の先端医学や生命科学は、現にそうした狭い人命尊重主義に守られて進歩してきているといえよう。いうならば、近代人は、このようにしてまず19世紀に神を殺し、さらに自分たちが神になろうとして、ついには人をも殺す、つまり本来の人間性をも見失ってしまいつつある。しかも20世紀に急速に発展した科学技術が可能にした大量の化石エネルギー消費の物質文明は、ついに深刻な気候変動という地球環境の破壊さえもたらすようになった。しかもこの地球環境の破壊とは、人類生存を脅かす地球全体の生態系の破壊にほかならない。

2　「生命（せいめい）」という科学文明と「命（いのち）」という宗教文化と

今日の先端科学は、約40億年前の地球に原始生物が誕生し、さまざまな進化の末に今から２００万年ほど前に人類が生息するようになったことを明らかにしている。しかも我われ人間の生命は、そうした原始生物から遥かに遺伝子を継承し、そればかりか現存

する地上のあらゆる微生物や動植物とも我われは連鎖的に生命を共有していることも、明らかにしている。今や、地球全体が太陽や水や空気との微妙なバランスを保ちながら、無数の生物が共生する壮大な世界であることが確認されている。つまり地球は、まさしくガイア、全体が生きている惑星なのである。しかも、この生きている地球、かけがえのないガイアが、我われ人類の独占的な物質文明の被害を受けてその壮大な生命体が危機に瀕し、肝心の人類生存さえ危ぶまれるに至っている。したがって、21世紀を迎えての人類最大の課題は、この破壊的な物質文明の軌道を修正して、再び地上の生物全体が適切に共生し人類もまた健康に生存するような、豊かな「生命文明」へと向かうことではあるまいか。

そこで、まず肝心なことは、確かに人類はこうした地球大の生命連鎖のほんの一部にしか過ぎないが、しかし実は、そうした現象を神秘にして崇高な「命（いのち）」として見出したのは他ならぬ人類の宗教文化だという紛れもない事実である。

たとえば英国の民族学者エドワード・タイラー（Sir Edward B. Tylor, 1832–1917）は、その著『原始文化』（１８７１）のなかで、原始人が仲間の死と自分の夢の体験から生者には霊魂が内在すると理解したところから、アニミズムと彼が名づけた人類最初の宗教が発生したと論じたが（注2）、その発端の正否はともかくとして、私は、歴史を通じた全宗教には、こうした霊的 spiritual な生命観の問題こそがその根底にあると考えている。原始時代から現代に至るまで、人間は、自己を理解する自己超越（self-transcendence）の営みのなかで自分が「生きている」と認識した瞬間から、宗教に普遍的な課題が生じたのではないか。つまり本来、人類が発見した「命（いのち）」とは、他ならぬ自分が霊的存在、すなわちイノチあるものであること。生きることの神秘や矛盾に直面する、自分がなぜ生まれ、なぜ生き、なぜ死ぬのか、という主体的、実存的なイノチの問題である。そのイノチは、現代に語られるような客観的な生命現象ではない。それは、三人称的に客体化した「彼や彼らの生命（せいめい）」ではなく、一人称、二人称の主体的な「我と我らの命（いのち）」なのである。近代の医学や生命科学がその対象にする「生命（せいめい）」とは、ひとまず生きる主体の精神ないし心の営みを捨象し棚上げした生命現象でしかない。人類が、その当初から他の生物に無いイノチの自覚と文化を持つからには、「生命」問題は単に生命科学の問題にとどまらず、今後とも変わることなく人間主体の実存的問題でありつづける。いいかえれば、地上の生物はすべて個体としてその生命を全うし子孫を残す種的意思をもっているが、人間はそれ以上に個体の生死を自覚し、よりよく生を全うするために生死の意味と価値とを永遠に問いつづける宿命を負っているといわねばならない。

今日の先端科学が地球上の生態系に共生する人類のあり方を明らかにした以上、今や人類だけが生存する特権を神から与えられたと考えることは不可能である。生きとし生けるものすべてが、

かけがえのない霊的な命を与えられており、その生死を全うするなかでお互いが生かし生かされていることの厳粛な事実を見据えるならば、そこに自ずから自他の命の尊さ、自己が生かされてあることの有り難さ、人知を超えた命の神秘な働きに目覚める筈ではなかろうか。

結びに　新たな「生命文明」に向けて

これまで述べてきたように、我われ人間は、「人間のみ（生きながら）自分の死を観念しうる（Man can conceive of his own death.）」（Glenn M. Vernon, *Sociology of Death*,）（注3）と指摘されるように、この一点で他の生物の位相を超えている。また、おそらく人間だけが、己れの生存をめぐる根本の実存的矛盾、つまり生きることが死ぬことであり、そればかりか生きること自体が、食べ物や生きる糧として他の多くの生き物を殺すことでもあることの矛盾に気づいている。

そしてこの事実こそが、ヒトが人間であるためには、何らかの宗教的超越の手段に訴えざるを得ない、という人類文化の精神史を物語っている。米国の古典学者でユニークな思想家でもあるノーマン・ブラウンは、特にインドのジャイナ教の徹底した不殺生の戒律に言及して、「儀礼的殺生の手段のほかに、殺生を免れる道は無い（There is no way to avoid murder, except by ritual murder.）」（Norman O. Brown, *Love's Body*,）（注4）と喝破している。私もまた、すべての宗教は、それがどんな形にせよ、そうした根源的な生きることの罪や不安から人間の心を解き放つための真剣な模索の営みにもとづいており、だからこそ、さまざまな神話伝承や象徴的儀礼、とりわけ何らかの犠牲供進（sacrifice）を伴う多彩な象徴的贖罪という祈りの様式が諸宗教にあると思っている。

日本の神道では、我われに霊魂を与え我われを生かしめている先祖や自然の働きを眼に見えぬ命の霊性としてカミとし、その神々を祭ることで神人一体の共存共栄を祈ってきた。わが命は親を通じ神々や祖先から与えられ、また我が死を通じて、我が子孫や自然の命に伝えられていく。我もまた、その生死を全うするなかで、やがて子孫が祭ってくれる祖霊となる。そこには、人も人びとを生かしめる万物も、すべて霊的な命を共有する神秘な世界への祈りがある。

日本仏教の伝統にも、「一切衆生悉有仏性」（涅槃経、特に華厳宗と天台宗）という偈が広く経論や文芸にもてはやされ、また「草木国土悉皆成仏」や「草木成仏」なども教説ばかりか謡曲や物語にもよく引用されるなど、人間などの有情ばかりか木石などの無情一切の万物にまで成仏すべき「仏性」という名の生命的霊性をも認めてきた。

神道や仏教をも含めた日本の精神的伝統が育んできた本来の霊的生命観を、近代科学が明らかにした生態系の共生関係に照らし

て一層徹底させることこそ、過去の20世紀を支配してきた物質文明への軌道を修正して、今後21世紀を生きる多くの人びとに、物心ともに豊かさをもたらす「生命文明」（注5）の実現へと歩みだす指針ともなるのではないでしょうか。

注

1 Erich Fromm, "The Present Human Condition," 1955-56 in *The Dogma of Christ*, 1963, p. 101.

2 Edward.B.Tylor, *Primitive Culture: researches into the development of mythology, philosophy, religion, language, art, and custom*, 2 vols, John Murray, London, 1871 (Harper Torchbooks, 1958)（比屋根安定訳『原始文化』誠信書房、１９６２年）、特にアニィズムについては11章から17章を参照。

3 Glenn M. Vernon, *Sociology of Death: An Analysis of Death-Related Behavior*, The Ronald Press Co., N.Y., 1970, Chap. 2, pp. 20-54.

4 Norman O. Brown, *Love's Body*, Vintage Books, Random House, N.Y., 1966, p. 172.

5 薗田稔「『物質文明から生命文明へ』を振り返って」同著『文化としての神道』（弘文堂、２００５年）所収、１４６−１５０頁。

＊　＊

［和田］ 薗田先生ありがとうございました。

物質文明が地球全体の生態系の破壊をもたらしているという、近代人、現代人の抱える病を喝破してくださいました。また霊的で、神秘的で、主体的な命、その命は時間を超えてつながっているということを指摘いただきながら、生命文明という方向性を示してくださいました。

それでは次にバグワン先生お願いいたします。

太平洋共同体の精神性と気候変動

太平洋教会協議会事務総長
ジェームズ・バグワン

尊敬する宗教者の皆様、兄弟・姉妹の皆様、本日、私どもが集まったこの場所は、聖なる場所の一部であり、今日までこの地をお守りくださってきた皆様に感謝申し上げます。また、大地や海といった大自然と共に生きてこられた皆様に敬意を表しますとともに、すべての皆様方と、過去、現在、未来にわたって、愛と平和を分かち合いたいと思います。

私たちは、神の恩寵、平和、真実、喜び、命と幸福を求めて祈りを捧げます。また、神の平安が大地や海に満ち満ちて、それらを「我が家」と呼び、大地を踏みしめ、大海原に舟を漕ぎ出す人々すべてに注がれることを願っております。

フィジー語には「ブラ」と「ヴィナカ」という言葉があります。「ブラ」は「命」あるいは「健康」、つまり「幸福で安心できる状態」を指します。「ヴィナカ」は「感謝の気持ち」さらに具体的にいえば「豊穣」という意味もあります。ですから、「ブラ・ヴィ

ナカ」という挨拶は、「たくさん幸福を」という意味になります。皆様に私から「ブラ・ヴィナカ」と挨拶を送りたいと思います。

この度、比叡山宗教サミット35周年記念の集いにお招きくださり、発言の機会をいただきましたことに心から感謝申し上げます。

私は太平洋教会の指導者としてではなく、そこに仕える者としてここに参列しております。キリスト教共同体の信徒は太平洋の島々に住むおよそ１５００万人の80％に当たり、「地球の肺」とも呼ばれている広範な海域を守り育てています。私はその信徒や共同体の保護者に仕える者として、また、その代表としてこの場にまいりました。

太平洋の共同体では人間同士や人間と環境との結びつきなどの精神性が深く浸透しており核心を成しています。

私たちがお互いや自然界を理解し、触れあう時、その中心にあるのは精神性です。私たちが生来持っている知識を知恵に高め、私たちの周囲の豊かな恵みに感謝して、それらを大切に扱うように導いているのも、この精神性です。

太平洋のさまざまな共同体には、キリスト教や、その他多くの信仰や教えが根付いていますが、この精神性はこれらの多くの教えによって高められてきました。私たちは、これらの信仰や教えをこの地球上に住む大多数の方々と共有しています。

太平洋の人々が持つ精神性では、この世界の生きとし生けるものは、その命が網の目のようにつながっていると考え、そのような世界へ深い敬意を求めています。また、互いに思いやりを持ち、困難に打ち勝つ共同体の一員として生き、利益よりも幸福を大切にすることが重視されており、太平洋における「神の家族」を守り、「紺碧の海」を守り育てることが求められています。

私たちが直面する多くの問題に対処しようとする時、このような精神性に基づく深い洞察、思考と判断、そして人生を肯定的に捉える生き方は、科学や政治の立場から話し合うのと同様に非常に大切なことです。今日、私たちは新型コロナウイルスの蔓延、気候変動の危機、海洋汚染といった問題に直面しています。私たちは海によって互いに結びつき、また海が地球上の生命に息を吹き込み育んでいるのです。さらに、「持続的ではない開発」にも向き合わなければなりません。それは「欠乏のイデオロギー」に基づき、経済を重視し、自然を採取の対象としてきた結果、私たちの周囲の環境、山や海岸、「紺碧の海」を脅かしています。

私たちの祖先は、夜空の星を確認しながら大海原を大きなカヌーで横切り、自然と共生してきました。それは、ヨーロッパの人々が太平洋の島々を発見し征服した何千年も前からのことです。私たちが祖先から受け継いだ考え方や知識では、人間は生態系の一部であり、決して生態系の上に立つものではありません。

太平洋地域では、私たちを大地と海、そして大空と結びつけている聖なる絆がキリスト教の信仰に受け入れられ、大自然と一つの家族として暮らすことに賛同を得ていると理解しています。私

たちは赤ん坊が生まれると苗木を植えて、その根元にへその緒を埋め、赤ん坊が大地に根付くように願います。私たちの社会で受け継がれてきたこの聖なる関係は、地球全体の生物が織り成す「共通の家族」の命を守る上で鍵となるものです。

気候変動によって私たちは悲しい現実を思い知らされました。経済が取り扱うのは、もはや「地球家族」ではないという現実です。経済のシステムによって社会全体が、社会的・生態的・文化的な意味で影響を受けています。経済ばかりに関心が向かった結果、「家族」とは小さな家庭の集まりだけを指すのだという、危険な発想が生まれました。

地球の支配と生物の採取というイデオロギーに基づいた西洋の開発モデルは、経済、エコロジー、倫理をつないでいた聖なる糸をズタズタに切り離してしまい、壊滅的な結果を招きました。

このようなタイプの開発では、「生態系とは、その構成要素が周囲の環境と相互作用するものだ」という考え方が否定されています。生態学的・社会的・知性的・精神的な意味で「地球家族」としての一体化を否定するのです。

太平洋の人々は、気候変動の影響を直接受ける最前線にいます。そのため「持続可能な開発」として促進されてきたことが、実際には決して「持続的」ではなかったことを体験してきました。

京都議定書が採択される前年以来、26年半ぶりに京都に戻ることができ、大変うれしく思っています。京都議定書は、「共通だが差異のある責任」の原則に従い、先進国を結束させ、より重い義務を課したことを思い起こします。なぜなら、現在の大気中の高いレベルの地球温暖化ガス排出量には、先進国に大きな責任があると認識されたからです。今日、パリ協定のもと、公平な問題として、資金調達や排出量軽減の難しい国々から環境を汚染している人々に責任を求める声が上がっています。

私たちには、深い海の底から空に接する山の頂にいたる生きとし生けるものが発するうめき声や最も弱いものの叫び声が聞こえます。これらの声を増幅して伝えることが、神と環境との絆を持つ宗教者としての私たちの務めでしょう。

私たちが世界に求めるのは新しい生き方です。それは、私たちの兄弟・姉妹である生き物や自然を搾取の対象とせず、自然と共生してきた私たちの祖先の慣行に敬意を表す生き方です。

ローマ教皇フランシスコは、私たち人間とそれ以外の生き物から成る家族の連帯を強めるようにと、エコロジカルな改心を呼びかけられました。私たちはこの呼びかけに深い共感を覚えます。

太平洋における「神の家族」では、これを「生態系の絨毯を織り直す」と表現しています。つまり、生態学、経済、そして全キリスト教徒の世界的連帯をつなぐ聖なる絆を新たに結び強化することが、私たち共通の「地球家族」の命を守る上で鍵となると確信しております。

私たちが気候変動の危機を克服できるかどうかは、どのような

倫理観や価値観を私たちが持つかにかかっています。人間と環境および人間同士の関係は、倫理観や価値観によって決定づけられるからです。

政治のやり方がまずく、社会正義が十分守られない状況では、その結果が共同体による土地、大小の河川、森林、海洋資源の管理にあらわれるでしょう。

逆に、自然環境が人々の共同体に与えてくれる恵みに感謝すれば、共同体でうまく自己管理がなされ、人々は資源を共有し、正義が行われるでしょう。

私たちは、開発優先の論理を改め、真にエコロジカルなものに紡ぎ直すことが、太平洋と地球全体における気候変動の危機や社会的・経済的危機を脱する鍵となるだけではなく、「地球家族」の繁栄につながるものだと確信しています。

宗教者として、私たちが取り組むべきことは次の通りです。

- 私たちと同じ教えを信じる人々の心を、地球や他の人々との結びつきを深める方向に向けるように、さらに努力すること
- 教育機関や文化機関に対して、必要不可欠な環境教育を強化し、そこに重点を置くように勧めること
- 環境問題に関する公の討論に積極的に参加すること
- 信徒や教会の機関に対して、近隣の人々と共に持続可能で回復力があり、かつ公正な共同体を構築するように奨励すること
- 二酸化炭素の排出削減の重要性を強調すること
- 共同体の人々に持続可能なライフスタイルを奨励すること
- 財政投資が、環境と社会に対する責任という基準に合致するように努力すること
- 購入する商品やサービスを同様の倫理基準に照らし合わせて評価すること

私が所属する共同体ではすでに最悪の事態に備え始めています。最終的に海抜の低いサンゴ礁の島国の人々が移住を余儀なくされ、その結果、精神的、社会的、文化的なトラウマに耐えなければならなくなるのです。地球そのものとそこに暮らす人々の苦しみが私たちが声を上げる理由なのです。

私たちは、気候変動と人権に関する国際司法裁判所からの勧告的意見書と化石燃料不拡散条約の訴え、そして国際刑事裁判所においてのエコサイドの認知がされるようサポートしています（エコサイドとは、「エコ」と大量虐殺を意味する「ジェノサイド」を組み合わせた語。自然を大規模に破壊し、気候や生態系に緊急的な事態を引き起こすことを指す）。

今日、私が身に着けている十字架は、単に信仰の象徴というだけではありません。十字架は、愛、正義、生と死、赦し、贖罪、希望など多くの象徴ですが、この特別な十字架は、脆さを思い起こさせるものなのです。この十字架は、私の妻の郷里であり異常

気象の危険にさらされているキリバス共和国の子供たちが集めた貝殻で作られました。キリバス共和国は島の全域を覆う大潮や、塩害で農業がほとんどできない状態にみまわれ、海面上昇により人々が神聖な土地から永久に引き離されるような状況がおこっているのです。この十字架は、現在と未来の世代の生活が、私たちにかかっていることを日々思い起こさせてくれます。

最後に皆さんと共に、努力すること、祈ること、生き物に対する正義を求めることを決してやめず、私たち太平洋の人々が「マナ」と呼ぶ集団のエネルギーをグローバルな変革を起こすために用いていきたいと思います。生物多様性の保護を開発の中心課題として位置づけ、精神性や環境と調和のとれた生活習慣と先祖伝来の知識を守り、少数の人々の利益よりも全員の幸福を重視するような変革を引き起こすために用いるのです。

私たちが知恵を授かるように祈りましょう。さらに、気温上昇を1.5度以内に抑え、二酸化炭素の排出を実質ゼロにするという目標を達成しましょう。温暖化への責任がもっとも少ないにもかかわらず、その被害をもっとも多く被っている人々を支援するための融資を行うことを確約し、その約束を遂行する政治的な勇気をもつように祈りたいと思います。

皆様に神のご加護がありますように。

＊　＊

[和田]　先立っての打ち合わせの際、バグワン先生が控え室で、人間が自然や環境を所有しているのではなく、自然や環境が人間を所有しているのだと話してくださいました。今の発表の中で、赤ちゃんが生まれると、へその緒を苗木と一緒に植えて、その苗木と共に赤ちゃんが育つというお話もありました。まさに自然と人間が共存し、命がつながっていることを体験し、体感する。そのような知恵や知識が宗教、精神性の中にあるのではないかと思いました。

また、フィジーや太平洋諸国の皆様方はすでに最悪の事態に備えているというお話もございました。とても切実な声として、具体的な実践に向けたご提案もいただきました。

それでは続きまして、竹村先生よろしくお願いいたします。

気候変動と宗教者の責務
――仏教の立場から

東洋大学名誉教授
竹村牧男

はじめに――問題解決への道

環境問題、特に気候変動の問題が、地球とそこに住む人類、動植物等に深刻な影響を与えていることは、もはや再説する必要はないでしょう。この環境問題に対しては、われわれは多方面から真剣に対処すべきだと思います。たとえば、次のようです。

①科学・技術の進展による解決（省エネ・無公害技術の開発等。地球システム）
②社会システムの変換による解決（循環型社会への移行。社会システム）
③ライフスタイルの転換による解決（人間の欲望の抑止。行動レベル。人間システム）
④人間観・世界観の確立による解決（生きる目標の自覚。思想レベル。文化システム）

特に気候変動に焦点をあてたとき、CO_2を中心とした温暖化効果ガス排出の低減化が焦点になりますが、今、世界中の産業界では、水素エネルギーの活用等に向けてしのぎを削っているものと思われます。こうした技術革新は、劇的な効果さえ生む可能性があります。

その意味でも、環境問題に対しては、上述の各方面においての取組みを、総合的に推進すべきです。先年、ローマ・カトリック教皇フランシスコは回勅、『ラウダート・シ』を発表し、キリスト教の立場から環境問題への真摯な対処を訴えましたが、その中で、科学技術も動員した「総合的な取組み」の必要性を強調していました。私は特にそのことに深く共感した次第です。

仏教の人間観・世界観

そうした中で、宗教者の責務は、どのように考えられるのでしょうか。宗教者であると同時に、科学者であったり、政治家であったりすれば、それぞれの専門分野において、環境問題の解決につながる道を鋭意、追求してほしいものです。しかし、聖職者などの純然たる宗教者や、信仰を持つ一般市民は、宗教的生活を送る中で、この問題に対し何をすべきなのでしょうか。私は、このこ

とを仏教の中から考えてみたいと思います。

まず、自己と地球環境に関する世界観を明確にし、それを少なくとも同じ信仰を持つ者同士で共有し、さらに一般市民にも理解を求めるということが必要でしょう。

仏教では、古来、個体すなわち身・心と環境世界とは、不二一体と考えられてきました。前者を正報、後者を依報といいますが、依正不二というのです。特に唯識思想においては、身体も環境も、人々の心の最深部にある阿頼耶識の中にあるとされています。つまり、環境も自己なのです。身心と環境とは一組で自己であることを、まず明瞭に自覚すべきでしょう。

このとき、環境を傷つけることは自己を傷つけることになるのであり、このことをよく理解すれば、健全な環境世界の保護・維持に努めなければとの思いも生まれるものと思います。

次に、仏教ではわれわれ人間の住む国土を「娑婆」といいますが、これは苦しみを耐えなければならない世界、忍耐を要する国土の意味です。そこを汚れた世界、穢土ともいいます。しかしその本体は、実は仏さまの浄土なのだという見方もあります。『法華経』では、インドのある特定の場所、霊鷲山も、実は久遠実成の釈迦牟尼仏の仏国土にほかならないといっています。

また、日本天台宗では、その教理の中から、「草木国土、悉皆成仏」という句を生み出しました。この句の意味は、「草木国土もすべて成仏する」ではなく、「草木国土もすべてすでに成仏している」、つまり仏の本体を自己としているという意味にほかなりません。この世界が本来、仏の国土であれば、われわれはそれを損ねたり壊したりすることは出来ないはずです。

そのように、仏教的世界観から自己と環境世界の意味が深く理解されれば、実際の生活においてその了解に沿った生き方が志向されるはずだと思います。

仏教の戒を見直す

次に、仏教が説く仏教者としての生き方をもう一度、深く顧み、その思想をこの現代の状況に生かしていくことが必要です。仏教者としての生き方とは、要は戒律のことですが、日本ではどういうわけか戒律があまり意識されていません。律は修行者としての僧侶らの修行共同体において守られるべきもので、他律的なものですが、戒は本来、自律的なものであり、信仰の確立とともに自らそのような生き方を選ぼうとするところにあるものです。

大乗戒として、『梵網経』の十重四十八軽戒があり、最澄はこれを採用しました。そこには、十重戒のみならず、四十八軽戒も含まれているのであり、それらを点検すれば、環境問題の解決に効果的な生き方も含まれていることと思われます。

一方、大乗仏教には、『瑜伽師地論』系統の、「三聚浄戒」というものもあります。これは、摂律義戒・摂善法戒・饒益有情戒か

ら成るものであり、要するに、悪をしない・善を行う・他者を利益する、という三つの精神から成り立っているものです。ではここで、悪とは何でしょうか、善とは何でしょうか。それは、次のように定義されています。

二世において、自他を順益するが為の故に、名づけて善と為す。
二世において、自他を違損するが為の故に、不善（悪）と名づく。

このようにわれわれの行為は、この世だけでなく来世にわたっても、また自分だけでなく他者に対しても、影響を及ぼすものと見られているのです。特に悪の行為は、自分だけでなく他者に対しても、この世だけでなく未来にわたっても、いのちの願いに背き損ねていく働きがあるというのです。自分だけでなく、他者をも損ねるような行為は、さすがにできないでしょう。他者に対して、忍びないからです。

実は初期大乗仏教の戒としては、十善業道が採用されていました。不殺生・不偸盗・不邪婬、不妄語・不悪口・不綺語・不両舌、不貪欲・不瞋恚・不邪見というものです。逆に悪とは、殺生・偸盗・邪婬、妄語・悪口・綺語・両舌、貪欲・瞋恚・邪見ということになります。これらは他者への悪しき影響をもたらすのみならず、たとえば貪欲や殺生、邪見等は、環境問題の悪化に大きな影響を与えることでしょう。このように、悪をなさず、善をなすことは、同時代および未来世代の他者に利益をもたらすことになります。

三聚浄戒は、止悪・修善のみならず、饒益有情戒すなわち利他の活動の実践ということが含まれているところに、一つの大きな特徴があります。最澄も、「忘己利他」の実践を尊ばれました。大乗仏教徒（菩薩）の徳目の一つに、「四無量心」というものがあります。それは、「慈・悲・喜・捨」というもので、それぞれの無量の心を持つべきだというのです。その内容として、慈は与楽の心、悲は抜苦の心、喜は他者が離苦得楽したのを喜ぶ心、捨はこのことに於いて誰も差別しない心です。このような心が、仏教徒の根本にあるべき心なのです。

共苦に基づく世代間倫理を

仏教者としての生き方、ライフスタイルは、こうした戒律から導くことが出来ます。仏教者は、このことを深く認識し、自から実践するとともに、他の人々にもその生き方を訴えていくべきでしょう。そこに仏教者の責務があります。

その行動基準は、他者に苦を与えるのは忍びない、他者の苦を取り除きたいという、他者への共感共苦の心にあります。それは、正義であるからそれに従うべきという、他律的なものではなく、共苦において忍びないという、自律的なものなのです。環境問題における倫理は、世代間倫理として受け止める必要がありますが、

この倫理の根拠も、未来世代の人々等の苦悩を招来すべきではないという、共苦の立場に見出すことができるでしょう。

ここから、現代の状況に照らして、さらに具体的なライフスタイルが導かれてくることでしょう。気候変動との関連でいえば少しでも温暖化効果ガスの排出を増やさないよう、減らすようにする行動を採るということです。その具体的な行動様式に関しては、関係の書物やウェブ上等に種々の提案があると思いますのでそれらにゆだねますが、とにかく「少欲知足」はその基本中の基本でしょう。

私は、今日の日本において、特に食に対する過剰な欲望の氾濫を憂えています。テレビでは、グルメ番組や爆食番組などが何の痛みを覚えることなく、日常的に放映されています。食物の遠距離輸送には、多大のエネルギーを必要としていますし、まだ食べられるのに廃棄された食物の焼却処分は、まさにCO_2の排出を促進しています。SDGsが日本ではかなり浸透し、企業の努力も多くみられるようになりましたが、テレビ業界だけは視聴率優先のようで、地球社会や日本の奥ゆかしい文化等を顧みることはほぼ皆無のようで、残念なことだと思います。

最後に、ディープ・エコロジーの提唱者、アルネ・ネスが説くライフスタイルを紹介したいと思います。そこにある、「①質素な手段を用いる、②反消費主義をとる、④欲望ではなく不可欠の必要を満たす努力をする、⑤刺激の強い経験ではなく、深く豊かな経験を得ようとする」などには感銘を受けるほか、「⑪第三世界、第四世界の状況を考え、自分の生活のあり方が貧困のなかで暮らす人々の生活に比べ、あまりにも高水準であまりにも違ったものにならないようにしようとする。ライフスタイルの地球規模の連帯をめざす」は、極めて重要なものであると思っております。

以上、短時間のなかですので、十分に説明できなかった面もあるかと思いますが、これで私の発表を終えます。

＊　　＊

［和田］　竹村先生ありがとうございました。私自身もそうですが、日本での生活が時にはあまりにも高水準になっていることもあると思います。そして現在だけではなく、未来の世代から何かを知らずに搾取していたり、何かしらの影響を与えているのかもしれません。先生がご指摘くださった、現在から未来までも含めた他者の苦に思いを馳せる共感、忍びない共苦、これらを意識すると毎日の生活も一つひとつ見直すことができるのではないかと思います。

それでは最後のご発表でございます。カーヒル先生お願いいたします。

巨大都市と気候変動
――宗教者の役割

アジア宗教者平和会議実務議長
デスモンド・カーヒル

最初に、このような場でお話しする機会をいただきましたことを大変光栄に思い、心より感謝申し上げます。アジア宗教者平和会議には、世界の人口の52％を擁する22ヵ国が参加しておりますが、本日はその代表としてご挨拶申し上げます。

また、安倍晋三元首相の暗殺に心を痛めておられる日本の皆様に、オーストラリアよりお悔やみ申し上げます。安倍元首相はオーストラリアとも親密な関係にあり、私たちは元首相が示された友情を高く評価しておりました。

私たちは今、日本仏教の聖地、比叡山におります。ほとんどの宗教に聖なる山があります。たとえばシナイ山、普陀山、カイラス山、それにオーストラリアの先住民が信仰するウルルです。この世界、全宇宙は、私たちに与えられた贈り物であり恵みであるのと同時に、人類は自然環境だけではなく、人為的に造られた環境に対しても責任を負っております。

ほとんどの宗教に聖なる山があるように、すべての信仰には聖なる都市もあります。イスラム教にはメジナとメッカ、ユダヤ教とキリスト教にはエルサレム、カトリックにはローマ、チベット仏教にはラサ、シーク教にはアムリトサル、そしてヒンドゥー教には重要な巡礼地であり「死者の街」でもあるヴァーラーナシー（ベナレス）があります。

さて、今日の主題は巨大都市、メガロポリスです。２００７年に世界の都市人口は地方の人口を超え、現在では世界の総人口の55％が面積にしてわずか３％しかない都市部に住んでいます。国連では、２０５０年には世界総人口の68％が都市の住民になると推定しています。人口が１千万を超す巨大都市の中で国連のリストでトップ10に入っているのは、今のところアジア太平洋地域では中国の上海と北京、それに日本の東京と大阪だけですが、２０３０年には、その数がアジア太平洋地域で29、その他の地域で19に達するといわれています。

巨大都市はビジネスや経済活動の拠点であり、技術革新や工業生産の中心でもありますが、同時にどの都市においても宗教が重要な役割を担っています。都市ならではの役割を持つ宗教施設は、多くの人々に聖なる空間として利用され、人生における重要な儀式がそこで営まれています。時には死者を送り、追悼し、祝い事や記念行事を行い、また、貧しい人、病気の人、ホームレスなどの困難な状況にある人々を支援する施設として使われているので

す。都市の多くは中心部近くに、寺院、教会、モスク、シナゴーク、グルドワラ（シーク教の礼拝施設）などの礼拝所が点在しています。

その一方で、巨大都市は気候変動による深刻な影響を受けています。自然災害、干ばつ、食糧不足、異常気温などです。巨大都市は食料やエネルギーを大量消費し、化学物質で大気汚染を引き起こし、特に二酸化炭素・窒素酸化物・アンモニア・二酸化硫黄・黒色炭素・有機炭素などを含むガスやエアロゾルを排出します。さらに、都市では固体・液体・気体を問わず、山のような廃棄物が排出されています。

宗教者として私たちは、気候変動を科学的な事実として、その複雑な側面も含めて認めなければなりません。巨大都市は現在、危険状態にありますが、気候変動に対処しなければますます危機的な状態に陥るでしょう。どのような信仰においても、神や仏によって創造された環境を尊重し大切にしなければならないという教えは共通です。私たちは創造力を働かせ、さまざまな面において気候変動に対処する必要を、それぞれの集団の中やその集団を超えた幅広い人々に対して伝えていかなければなりません。

まず、自分たちの礼拝場所や宗教施設を改造することから始めてはいかがでしょうか。暖房や換気、空調システムの効率を良くするために、断熱材やシーリング材、防湿材などを利用したり、割れ目があれば封印し、庭に木々や灌木を植えたり、建物内部に緑のシダ類を置き、屋上をルーフガーデンにするといった工夫をするとよいでしょう。また、太陽光パネルや風力発電のタービンを設置して、クリーンな再生可能エネルギーを利用した神聖な空間にすることも可能でしょう。こうして聖なる人々、聖なる植物、聖なる空間ができるのです。

さらに、私たちは宗教者として都市の改造を以下の点で提言する責任があります。

- 巨大都市の弱点と脆弱性を知ること
- 温室効果ガスの排出を削減し、自分が住む都市のカーボンフットプリント（CO_2排出量）を知ること
- 屋上庭園の他、木や灌木を周囲に植えること
- 省エネ技術を利用すること
- ガソリン車、ディーゼル車、バス、トラックより環境に優しい交通手段の利用を促進すること
- 防波堤、防潮堤、水害に強いビルを建設すること
- 土地の改造・修復を奨励すること
- コミュニティーを低地から移転させること
- 使用されていない都市空間を再利用すること
- 廃棄物を減らし、リサイクルすること
- プラスチックの使用を禁止すること

廃棄物は重要な問題です。生産・利用・廃棄が一直線に並んだ直線型経済から、廃棄物を削減・再利用・リサイクルする循環型経済に転換する必要があります。地球環境を守り巨大都市に新しい未来を開くために、倫理的・宗教的な枠組みを創設する上で宗教と宗教者が果たすべき役割は大きく、しかもまだ十分に活用されているとはいえません。

特に沿岸部にある都市は、気候変動ばかりか地盤沈下や加速する都市化によって危険にさらされています。もっともリスクの高い都市として、ジャカルタ、ラゴス、ヒューストン、ダッカ、ヴェニス、バンコク、ロッテルダム、マイアミ、エジプトのアレキサンドリアがあげられていますが、大阪をはじめとする他の都市も海面上昇や高潮、満潮時の水害の危険にさらされています。すべての都市において水の管理が優先事項になります。緑化による「グリーンシティ」だけではなく、水の管理が効果的にされる「ブルーシティ」を目指すべきでしょう。「ブルーシティ」とは、洪水も水不足も起きないように、また、水資源を汚染から守るために総合的な水の管理がなされている都市のことです。

今日の世界は、危険が増大する一方で、私たちの管理能力には限界があり、予測も難しくなっています。世界の巨大都市は気候変動に対処する上での拠点としての役割が期待されます。

最後に「緑の総主教」としても知られるコンスタンティノープル・エキュメニカル総主教のバルトロメオ一世聖下のお言葉を引用して、私の発言を締めくくりたいと思います。

「時の流れの中で決定的な瞬間、特に影響が長く続き永久に重要性が変わらない歴史的瞬間をギリシャ語で『カイロス』といいます。人類と地球全体にとって今はまさに『カイロス』といえるでしょう。すなわち、神が創造されたすべての生き物との関わりにおいて今は決定的な瞬間であり、地球上の命を人間が犯した無謀な行いによる最悪の結果から守るために適切な方法で対応しなければならない時なのです。私たちが今すぐに行動できるよう、神が知恵をお授けくださいますように」。

＊　＊

[和田] ありがとうございました。メガシティという他の先生方とは少し違う切り口で、メガシティの危険性や環境に深刻な負荷を与えているということをご指摘くださいました。そして廃棄物の問題をはじめ、とても実践的な提案もしてくださいました。最後に今まさに待ったなしだという決定的な瞬間に私たちがいることを『カイロス』として紹介してくださいました。その中で私たちは具体的な実践方法を考えていかねばならないと思います。カーヒル先生、ありがとうございました。

ここからは、お時間が許す限り、パネリストの先生方からお互いの発表を聞かれてのご質問やコメントを頂戴し、さらに理解を

深めていければと思います。

先生方、どうぞご質問がございましたら教えてください。

質疑応答

［薗田］ 今日のパネリストの方々のご発言で、一番私ども神道者として心に響いたのは、バグワン先生の発表であります。

先ほどの発表では、人間と他の環境の動植物は一体である、そこに区別するものはないという意味での万物の命の問題としてご指摘をいただいたのではないかと思っておりますが、要するにスピリチュアルライフを、人間だけではなく万物にも求めるということだろうと思います。

同時にバグワン先生はキリスト教の牧師でいらっしゃる。その点でお伺いしたいのは、キリスト教との関係もさることながら、太平洋のキリスト教会、もっと広い意味で欧米も含めたクリスチャンの皆さんが、土や動植物の命をスピリチュアルネイチャーとして、人間と共生するという考え方がどこまで説得されるのか、ご苦労があるのではないかと思い質問させていただきました。

［バグワン］ 私は、キリスト教の信仰において、大規模な転換が始まっていると思います。特に、教皇フランシスコによる回勅『ラウダート・シ』の発表は、カトリックだけでなく、世界中のキリスト教会、キリスト教徒に衝撃を与えた瞬間でした。

しかし、私たちが行ってきたことは信仰を脱植民地化するというプロセスでした。なぜなら、私たちは植民地になった経験を持っているからです。そして私たちの信仰が及ぼす影響について環境と政治的側面を抜きにして、精神的なことだけを考えることはできないのです。

今日、パネリストの先生方は、特に消費主義について話されました。これは私たちが直面している最大の課題です。

私たちの信仰の習慣や、精神性への信奉も、実際にはメディアの消費者でもあるということです。

今、世界で蔓延している情報は、テレビだけでなくスマートフォンからも発信され、私たちが信仰を通じて提示している解決策に対し直接挑戦しているのです。ですから、その考えと真剣に向き合っていかなければなりません。

［カーヒル］ バグワン先生の意見とは違った背景から付け加えさせていただきます。

欧米社会で宗教指導者たちは、この問題に関してリーダーシップを発揮してきました。『ラウダート・シ』は、いうまでもなくそのひとつの例です。

先ほどお話した「緑の総主教」は、地域社会に影響力を持って

きましたが、より具体的に行動する必要があると思います。まず初めに、先ほど申し上げた自分たちの崇拝の場所についてです。波及効果を持つには、すべての提案に耳を傾け、受け入れることができるように、宗教指導者がさらに意識を変えて、より実践的になることが必要です。

また、太平洋とは少し異なる背景ですが、私の国オーストラリアでは、先住民族であるアボリジニも大きな影響を及ぼしております。キリスト教では、カトリックよりもプロテスタントの方が、先住民の精神性との関わりにおいて、いくらか進んでおり、中心を担っています。

アボリジニの精神性には多くの事例がありますが、彼らの重要なコンセプトのひとつとして、「ダディリイ（Dadirii）」と呼ばれる、他者への深い精神的な傾聴が挙げられます。私たちはこれを継続し、その経験も参考にしなければなりません。

例えば、オーストラリアでは山火事（野火）が大きな問題になっています。私が住んでいるメルボルンでは２００９年の初頭に最悪の山火事のひとつが発生しました。三日連続で気温が摂氏46度を超え、山火事は州全体に広がり、２００人近くが命を落としました。なぜなら、私たちがアボリジニの定期的に行ってきた野焼きをしなかったからです。それは堆積し温度を上昇させてしまう下草を除去するためであり、カンガルーやワラビーなど、動物の通り道を茂みに作る効果もありました。

今、私たちは先住民のリーダーに指導を仰ぎこのような習慣を採用し始めています。

バグワンさんが太平洋島嶼国でも生じていると伝えていただきましたが、それは私たちが考えるもうひとつの重要な構成要素だと思います。

［和田］ キリスト教と精神性の関係へのご質問に対して、二つの視点からお答えくださいました。

今のご発言にもございましたが、オーストラリア、また今もヨーロッパで山火事が起きています。そしてキリスト教と、精神性の統合という話がありました。先ほど先生方の発表の中で環境は自己、そして命全体のつながりということを教えていただきました。そうした視点で考えることが、寺島先生もご指摘くださり、また期待してくださっている全体知で考えるということにつながっていくのではと思います。

最後に、昨年のＣＯＰ26の準備の中で、ある科学者が「科学者は調査や分析をして警鐘を鳴らすことはできる、しかし人々の行動を変えることはできない。それができるのは宗教者だ」とおっしゃっていました。私たちは、この知識を知恵とし、実行し、生き方を変えていく、その責務があるのではないかと思います。

パネリストの先生方、そして参加者の皆様、ありがとうございました。

THE INTERRELIGIOUS GATHERING OF PRAYER FOR WORLD PEACE

世界平和祈りの式典

■教宗派・団体代表登壇者

■開式挨拶
國富敬二（実行委員会副委員長／立正佼成会理事長）

■主催者代表挨拶
大樹孝啓（実行委員会名誉顧問／天台座主）

■聖エジディオ共同体代表挨拶
アゴスティーノ・ジョバニョーリ（聖エジディオ共同体アジア地域担当部長）

■比叡山メッセージ朗読

（敬称略）

比叡山宗教サミット35周年記念
「世界宗教者平和の祈りの集い」登壇者名簿

国　内

役　職	名　前
◎教派神道連合会	
日本宗教連盟理事長／教派神道連合会理事長／神道扶桑教管長	宍野　史生
大本教主	出口　　紅
黒住教教主	黒住　宗道
◎仏教	
全日本仏教会副会長	五條　良知
全日本仏教会理事長	里雄　康意
天台座主	大樹　孝啓
曹洞宗管長	石附　周行
◎キリスト教	
ローマ教皇庁駐日特命全権大使	レオ・ボッカルディ
日本キリスト教連合会委員長／ 日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団理事長	土屋　　潔
カトリック京都司教区司教	大塚　喜直
◎神道	
神社本庁総長	田中　恆清
神社本庁理事	金岡　正和
賀茂別雷神社宮司	田中　安比呂
日吉大社宮司	馬渕　直樹
◎新日本宗教団体連合会	
新日本宗教団体連合会理事長／大慧會教団会長	石倉　寿一
妙智會教団法嗣	宮本　惠司
◎イスラーム	
日本ムスリム協会会長	遠藤　利夫
◎諸宗教	
世界宗教者平和会議日本委員会理事長	植松　　誠

海外招請者

役　職	名　前
太平洋教会協議会事務総長	ジェームズ・バグワン
アジア宗教者平和会議実務議長	デスモンド・カーヒル
聖エジディオ共同体アジア地域担当部長	アゴスティーノ・ジョバニョーリ

実行委員会　委員長・副委員長

役　職	名　前
委員長／天台宗宗務総長	阿部　昌宏
副委員長／立正佼成会理事長	國富　敬二

敬称略・順不同

開式挨拶

このたびの比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」の開催にあたり、実行委員会を代表いたしまして、ご挨拶を申し上げます。

コロナ禍にもかかわらず、国内外からご参列くださいました宗教指導者の皆さま、ライブ配信を通してご出席くださっている皆さま、また、本日の開催にご尽力くださいました方々に対しまして、厚く御礼を申し上げます。

一昨年、昨年は、新型コロナウイルスの感染防止のため、会場での出席者を限定する形式で実施いたしましたが、本年は、こうして多くの方々と直接お会いすることができ、大変うれしく思います。

この「比叡山宗教サミット」は、昭和61年10月にイタリアのアッシジで開かれた「世界平和祈願の日」を受けまして、その翌年の8月に山田恵諦天台座主猊下の提唱により、初めて開催されました。

35周年を迎える本年のテーマは、『気候変動と宗教者の責務』です。皆さまもご存じの通り、近年では温暖化が原因とされる干ばつや豪雨、山林火災などが世界各地で発生しています。その中には、「何十年に一度」「百年に一度」といわれるほど深刻な災害も少なくありません。

全人類のみならず、地球に生きる全生物が直面している重大な環境危機に対して、午前中のシンポジウムでは、宗教者としてどのように向き合い、責務を果たしていくかを皆さまと模索しました。今回のサミット

を機縁として、私たちの具体的な役割を改めて確認し、毎日の生活のなかでの行動実践をお誓いしたいと思います。

私は、「比叡山宗教サミット」の精神の根幹、源流は、「祈り」と「対話」であると確信しています。「祈り」と「対話」を重んじてきた日本の宗教界は、「自他一如」の心で調和のとれた一つのチームであると、受けとめさせていただいています。さまざまな信仰で構成されている日本宗教界の姿は、世界に胸を張って誇れるモデルであり、今こそ再評価されるべきと強く感じています。「祈り」と「対話」の重要性を私たちに示し、強固な絆で結ばれたチームに導いてくださいました諸先輩方に対しまして、心から感謝いたします。誠にありがとうございます。

今年の秋には、地球の人口は80億に達すると報じられています。一人ひとりが自然災害の脅威に怯えることなく、安定した気候の中で平和に暮らせるよう切に願いつつ、微力ながら責務を果たしていくことをお誓いし、ご挨拶とさせていただきます。

令和4年8月4日

比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」
実行委員会副委員長　立正佼成会理事長　**國富敬二**

主催者代表挨拶

本日ここ比叡山に代表的宗教指導者の皆様と共に集い、比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」を開催できますこと、神仏のご加護であると深く感謝を申し上げ、また開催に至るまでご尽力を賜りました関係各位に厚く御礼を申し上げます。

比叡山宗教サミット「世界宗教者平和の祈りの集い」は、１９８６年にイタリア・アッシジにて催された「平和の祈り」の精神を継承し、今日まで世界の恒久平和を祈ってまいりました。本年は35周年という記念の年にあたり、ここに諸宗教・諸宗派代表の方々が合い寄り、心を一つにして祈りを捧げ、『集い』の継続を誓うものであります。

宗教の尊き導きを心の支えとする私たちは、異なる宗教間の相互理解を深め、共に手を携え世界の平和を願い、先人の聖者や大徳の営みを受け継ぎ祈りを捧げてまいりました。

そして、地球上の至るところで大規模豪雨や洪水、高温・乾燥とこれに連動した山火事、平均気温の上昇に伴う氷河の融解と氷河湖の決壊など温室効果ガスの増加に起因するとされる気候変動が危機的に激化し、人間を含む多くの動植物が多様性のみならず生存そのものを奪われようとしています。

かかる折に35周年という記念の年を迎えた「世界宗教者平和の祈りの集い」において、今回のテーマは各所に頻発して継続する武力紛争を心にかけながらも、すべての生命の拠り所である地球及びその環境保持を願って『気候変動と宗教者の責務』とされました。

環境問題は現代文明の当然の帰結ともいわれ、危機的気候変動にみられるごとく、その影響は地球に存在するすべての生き物に及ぶこととなります。この厳しい現実を前にして、私たち宗教者は気候変動に苦しむ人々に寄り添ってその支えとなり、問題解決のためには信徒等と協働して積極的に対処することが求められています。

宗教活動や生活のあらゆる分野で環境負荷の軽減・削減に積極的に努力し、併せて神仏の大いなるご冥助（みょうじょ）を切に祈ってまいりたいと思います。私たちのこの祈りが神仏の思し召しに適い、母なる大地が健やかならんことを謹んで誓願いたします。

ただいま、盛大な神仏の激励を賜りながらご挨拶を述べさせていただいた気持ちでございます。この豪雨に負けないよう力いっぱい、皆様方も共に頑張ってまいりましょう。

２０２２年８月４日

比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」
実行委員会名誉顧問　天台座主　**大樹孝啓**

聖エジディオ共同体代表挨拶

天台座主猊下、そしてご参加の宗教者、ご来賓の皆様。

まず、はじめに聖エジディオ共同体を代表して、また私個人としても、見境のない暴力の犠牲になられた安倍晋三元首相に哀悼の意を表し、すべての日本国民の皆様に心よりお悔やみ申し上げます。

皆様には、この重要なサミットを開催されましたこと、および聖エジディオ共同体の代表として私をお招きくださいましたことに感謝申し上げます。古くからの多くの友人に再会できましたことを心から喜ばしく思っておりますとともに、私の日本への旅にご配慮くださいました皆様に感謝申し上げます。そして、私がうれしく思っているのはそれだけではありません。新型コロナウイルスのパンデミックの中で、状況をみて、すぐに皆様が比叡山宗教サミットを再開するというご決断をされたことを、私は心より歓迎いたします。今回の「世界宗教者平和の祈りの集い」は、比叡山宗教サミットの35周年記念として開催されております。この伝統は非常に大切なものであり「アッシジの精神」の伝統と並行して継続されてきました。１９８６年にローマ教皇ヨハネ・パウロ二世聖下の呼びかけで「世界平和祈願集会」がイタリアのアッシジで開かれ、山田恵諦天台座主猊下もご参加くださいました。聖エジディオ共同体では、それ以来毎年、平和のための祈りの集いをヨーロッパの諸都市で開催しておりますが、日本宗教界の皆様が毎回ご参加くださっています。「アッシジの精神」に基づき、毎年、平和の友が世界中から集まり、現代の重要な問題について語り合い、多くの国々、特にアフリカ諸国での連帯プログラムを組織しております。今年の集いは10月末にローマで開かれます。皆様のご参加を心よりお待ちいたしております。

比叡山宗教サミットと「アッシジの精神」に則った集いは単なる記念行事ではありません。参加者は毎年、創設当初の精神を再確認し平和への献身を誓います。「冷戦終結後の世界は平和になったので、このような集まりはもはや必要ない」という声をよく耳にいたしましたが、今日、世界が平和とはほど遠い状態にあることは誰の目にも明らかです。アッシジと比叡山の精神はまだ十分に世界に届いていないのです。ウクライナで戦争が起きたのは、それ以前にあまりにも多くの戦争があり、それらに十分な関心が寄せられてこなかったからです。

第一に思い浮かぶのはシリアでの熾烈な戦争で、未だに終結していません。しかし、それ以外にも多くの戦争があったことを、よく覚えていらっしゃることでしょう。イラク、アフガニスタン、アフリカ諸国での戦争、特にエ

チオピアでの戦争は重大です。他にはイエメン、ジョージア、アルメニアとアゼルバイジャン等での戦争が挙げられます。国際社会がこれらの戦争にそれほど無関心でなければ、ウクライナでの戦争を防ぎ、これほど多くの人が傷つき、命を落とし、街が破壊されることもなかったでしょう。

このウクライナの戦争によって、私たちはすべての戦争が悲劇であるということを改めて認識しました。2022年2月24日以来、聖エジディオ共同体では何千人もの難民がウクライナから脱出するのを助け、避難所と、食料・医薬品・衣料の配給所をポーランド、スロバキア、チェコ、イタリアに開設してきました。ウクライナにいる私たちのメンバーが一人暮らしの高齢者、ホームレス、支援が届いていない病人、その他戦争によって困難な立場に置かれている多くの人々を支援しています。たとえ戦場から遠く離れていても、戦時下では薬を買うといった簡単なことさえもできません。それは薬がなければ死んでしまうような場合であってもです。私たちはこのような活動を通じて苦しい立場に置かれている人々との連帯を示し、同時に平和的で非暴力による戦争反対を訴えています。なぜならば、すべての戦争は間違いであり、正義に反するからです。私たちの活動には日本の信者の皆様からもご支援をいただいております。日本とウクライナは地理的に離れていても、心はそばにあるのです。私たちがネットワークを築くことで、皆様とウクライナを結びつけることができたことをうれしく思います。また、今後このネットワークを通してウクライナへの支援の輪が広がることを期待しております。

5カ月以上もの長きにわたってウクライナでの戦争は続いています。さらに、この戦争が拡大し核戦争へと発展する懸念すらあります。ここ日本には原子爆弾の恐ろしさを直に経験された方々がおられ、その記憶が皆様の心に根付いています。

最後に、ウクライナでの戦争によって、冷戦時代のように世界の分断が起きる可能性があります。端的にいえば、人類の未来には極めて大きな危機が迫っているのです。宗教の違いを乗り越えて、すべての人々が平和のために努力する必要があります。

比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」では、今まで以上に強い平和のメッセージを発信し、それを多くの方々と共有しなければなりません。

皆様、立ち止まらず、歩み続けましょう。

聖エジディオ共同体アジア地域担当部長　**アゴスティーノ・ジョバニョーリ**

比叡山メッセージ朗読

6つの教宗派団体の次世代を担う宗教者が代表として登壇し、1987年に採択された「比叡山メッセージ」をリレー朗読した。

イスラーム代表
藤谷勇介

新日本宗教団体連合会代表
力久美雪

神道代表
山口菫子

キリスト教代表
新田理沙子

仏教代表
小南妙覚

教派神道代表
黒住宗芳

THE INTERRELIGIOUS GATHERING OF PRAYER FOR WORLD PEACE

資料

- 実行委員会組織図
- 実行委員会名誉顧問・顧問名簿
- 実行委員会名簿
- 実行委員会経過報告
- 新聞報道記事

比叡山宗教サミット35周年記念
「世界宗教者平和の祈りの集い」実行委員会　組織図

比叡山宗教サミット35周年記念
「世界宗教者平和の祈りの集い」実行委員会　名誉顧問・顧問

名誉顧問		
氏　名	役　職	
大樹　孝啓	天台座主	
宍野　史生	日本宗教連盟理事長	教派神道連合会理事長／神道扶桑教管長
大谷　暢裕	全日本仏教会会長	真宗大谷派門首
土屋　　潔	日本キリスト教連合会委員長	日本アッセンブリーズ･オブ･ゴッド教団理事長
鷹司　尚武	神社本庁統理	
深田　充啓	新日本宗教団体連合会名誉会長	円応教教主

顧　　問		
氏　名	役　職	
出口　　紅	大本教主	
黒住　宗道	黒住教教主	
芳村　正徳	神習教教主	
里雄　康意	全日本仏教会理事長	
葛西　光義	高野山真言宗管長	
布施　浄慧	真言宗智山派管長	
浅井　侃雄	真言宗豊山派管長	
伊藤　唯眞	浄土門主	
大谷　光淳	浄土真宗本願寺派門主	
小倉　宗俊	臨済宗妙心寺派管長	
石附　周行	曹洞宗管長	
菅野　日彰	日蓮宗管長	
南澤　道人	曹洞宗大本山永平寺貫首	
前田　万葉	カトリック大阪大司教区枢機卿	
菊地　　功	日本カトリック司教協議会会長	カトリック東京大司教区大司教
武藤　謙一	日本聖公会首座主教	
田中　恆清	神社本庁総長	世界連邦日本宗教委員会会長
亀田　幸弘	神宮少宮司	
九條　道成	明治神宮宮司	
石倉　寿一	新日本宗教団体連合会理事長	大慧會教団会長
庭野　日鑛	立正佼成会会長	世界宗教者平和会議日本委員会会長
宮本　惠司	妙智會教団法嗣	
遠藤　利夫	日本ムスリム協会会長	
徳増　公明	日本ムスリム協会前会長	
植松　　誠	世界宗教者平和会議日本委員会理事長	

敬称略・順不同

比叡山宗教サミット35周年記念
「世界宗教者平和の祈りの集い」実行委員会

実行委員会		
役職名	氏　名	所属役職名
委員長	阿部　昌宏	天台宗宗務総長
副委員長	國富　敬二	立正佼成会理事長
実行委員	嶋田　　洋	金光教東京センター所長
	山田　　歌	大本本部総務部長
	黒住　宗芳	黒住教公室長
	尾井　貴童	全日本仏教会事務総長
	和多　善秀	全日本仏教会総務部長
	富岡　孝彰	全日本仏教会国際部長
	近藤　本淳	高野山真言宗総務部長
	三神　栄法	真言宗智山派総務部長
	岩脇　彰信	真言宗豊山派総務部長
	光岡　素生	浄土宗宗務役員
	中井　真人	浄土真宗本願寺派所務部長
	梯　　宗	真宗大谷派総務部長
	堀尾　行覚	臨済宗妙心寺派総務部長
	成田　隆真	曹洞宗人事部長
	鵜内　泰寛	日蓮宗宗務総長室長
	本田　勝宏	日本キリスト教連合会副委員長
	大塚　喜直	カトリック京都司教区司教
	柳本　　昭	カトリック京都司教区司祭
	高地　　敬	日本聖公会京都教区主教
	牛尾　　淳	神社本庁教化広報部長
	中嶋　茂博	京都府神社庁参事
	三井　紳作	神社本庁広報国際課長
	堀川　雄矢	北野天満宮権禰宜
	大滝　晃史	新日本宗教団体連合会事務局長
	和田惠久巳	立正佼成会総務部長
	中村憲一郎	立正佼成会京都教会長
	宮本　泰克	妙智會教団事務局長
	篠原　祥哲	世界宗教者平和会議日本委員会事務局長
	三善　康衣	世界宗教者平和会議日本委員会総務部長
	田中　朋清	世界連邦日本宗教委員会事務局長
	佐藤　裕一	日本ムスリム協会副会長
	吉澤　健吉	京都産業大学日本文化研究所客員研究員
	水尾　寂芳	延暦寺執行
	齊藤　哲圓	天台宗国際平和宗教協力協会専門委員
	杉谷　義恭	天台宗国際平和宗教協力協会専門委員

敬称略・順不同

実行委員会事務局

役職名	氏　名	所属役職名
事務局顧問	杉谷　義純	天台宗妙法院門跡門主
事務局相談役	黒住　宗道	黒住教教主
	小堀　光實	天台宗三千院門跡門主
	吉澤　健吉	京都産業大学日本文化研究所客員研究員
事務局長	小林　祖承	天台宗参務総務部長
副事務局長	舩戸　俊宏	天台宗参務財務部長
	小鴨　覚俊	延暦寺副執行総務部長

事務局各部会

役職名	氏　名	所属役職名
◎ 総務部		
部長	和多　善秀	全日本仏教会総務部長
事務局員	大滝　晃史	新日本宗教団体連合会事務局長
	三善　健雄	立正佼成会総務部渉外グループ
	木村　有宏	立正佼成会総務部渉外グループ
	小林　祖承	天台宗参務総務部長
	小鴨　覚俊	延暦寺副執行総務部長
	ネエモン珠聞	天台宗国際平和宗教協力協会専門委員
	高見　昌良	天台宗務庁総務課長
	田渕　観海	天台宗務庁国際課長
	福井　邦彦	天台宗務庁出版室次長
	梅山　恵匡	天台宗務庁大法会事務局幹事
	市原　久資	天台宗務庁出版室編集長
	礒村　良定	延暦寺総務部主事
	小寺　照哉	延暦寺総務部主事補
◎ 会議部		
部長	篠原　祥哲	世界宗教者平和会議日本委員会事務局長
事務局員	富岡　孝彰	全日本仏教会国際部長
	本田　勝宏	日本キリスト教連合会副委員長
	和田惠久巳	立正佼成会総務部長
	宮本　泰克	妙智會教団事務局長
	齊藤　哲圓	天台宗国際平和宗教協力協会専門委員
	岩田　真亮	天台宗参務教学部長
	小寺　照依	延暦寺副執行教化部長
	三浦　密照	天台宗務庁教学課長
	赤松　善暢	天台宗務庁布教課長
	清原　徹雄	延暦寺教化部主事
	山本　賢潤	延暦寺教化部主事

役職名	氏　名	所属役職名
◎ 式典部		
部長	山田　　歌	大本本部総務部長
事務局員	黒住　宗芳	黒住教公室長
	田中　朋清	世界連邦日本宗教委員会事務局長
	佐藤　裕一	日本ムスリム協会副会長
	堀　　孝三	大本本部総務課主事
	柴田　真成	天台宗参務社会部長
	竹内　純照	天台宗参務一隅を照らす運動総本部長
	小森　文道	延暦寺副執行管理部長
	中山　玄童	延暦寺副執行法務部長
	松岡　順海	天台宗務庁社会課長
	志井　浩順	天台宗務庁人権啓発課長
	加藤　泰崇	天台宗務庁一隅を照らす運動総本部次長
	星野　最宥	延暦寺法務部主事
	山口　弘湛	延暦寺管理部主事補
◎ 接遇部		
部長	中村憲一郎	立正佼成会京都教会長
事務局員	三井　紳作	神社本庁広報国際課長
	堀川　雄矢	北野天満宮権禰宜
	佐原　透修	立正佼成会総務部次長
	杉谷　義恭	天台宗国際平和宗教協力協会専門委員
	藤波　大吾	天台宗国際平和宗教協力協会専門委員
	破石　晋照	天台宗国際平和宗教協力協会専門委員
	甘井　亮淳	天台宗参務法人部長
	今出川行戒	延暦寺副執行参拝部長
	西村　智秀	天台宗務庁庶務課長
	小林　隆真	延暦寺阿弥陀堂執事
	秦　　行亘	延暦寺参拝部主事補
◎ 財務部		
部長	舩戸　俊宏	天台宗参務財務部長
事務局員	獅子王圓明	延暦寺副執行財務部長
	草別　善哉	天台宗務庁財務課長
	山形　宗湛	延暦寺財務部主事

敬称略・順不同

比叡山宗教サミット35周年記念
「世界宗教者平和の祈りの集い」実行委員会　経過報告

開催日	会議名	会　場
2021年(令和3年)		
12月16日	実行委員会準備委員会	天台宗務庁(オンライン併用)
2022年(令和4年)		
1月31日	第1回実行委員会及び事務局発足	天台宗務庁(オンライン)
〃	小委員会打合せ会	〃
2月24日	実行委員会第1回小委員会	天台宗務庁(オンライン)
3月　2日	第2回実行委員会	天台宗務庁(オンライン)
3月25日	実行委員会第2回小委員会	天台宗務庁(オンライン併用)
4月22日	第3回実行委員会	天台宗務庁(オンライン併用)
5月12日	教皇庁駐日特命全権大使 ご挨拶	駐日ローマ教皇庁大使館
5月18日	比叡山メッセージ起草に関する打合せ会	天台宗務庁
6月13日	実行委員会事務局合同部会及び各部会	天台宗務庁(オンライン併用)
〃	第1回総務部会	〃
〃	第1回会議部会	〃
〃	第1回接遇部会	〃
〃	第1回式典部会	〃
6月15日	第1回比叡山メッセージ起草委員会	天台宗務庁(オンライン併用)
6月27日	記者発表	ウェスティン都ホテル京都
7月27日	第4回実行委員会・合同部会	天台宗務庁(オンライン併用)
〃	第2回総務部会	〃
〃	第2回会議部会	〃
〃	第2回接遇部会	〃
〃	第2回式典部会	〃
〃	第2回比叡山メッセージ起草委員会	天台宗務庁
8月　4日	比叡山宗教サミット35周年記念 「世界宗教者平和の祈りの集い」	国立京都国際会館・比叡山上
11月14日	第5回実行委員会	天台宗務庁(オンライン併用)
〃	実行委員会解散・事務局閉鎖	〃

比叡山宗教サミット35周年記念
「世界宗教者平和の祈りの集い」実行委員会　新聞報道記事

朝日新聞　2022年8月5日(金)付　朝刊

気候変動 宗教者の役割は

京都と比叡山 サミットに800人

あいさつをする大樹孝啓・天台座主＝比叡山延暦寺

様々な宗教や宗派の代表者らが集まり、平和の祈りを捧げる「比叡山宗教サミット35周年記念『世界宗教者平和の祈りの集い』」が4日、大津市の延暦寺と京都市の国立京都国際会館であった。「気候変動と宗教者の責務」をテーマに掲げ、延暦寺での集いなどを開催。延べ800人が参加した。

国際会館で午前中にあったシンポジウムでは、日本、フィジー、オーストラリアのパネリストが気候変動で宗教者が果たすべき役割などについて語った。午後3時から比叡山にある延暦寺の特設広場に会場を移し、「世界平和祈りの式典」を開始すると、天候が急変して激しい雷雨に。98歳の大樹孝啓・天台座主は傘の下であいさつを続けたが、雷はやまず、諸宗教が祈りを捧げる以後のプログラムは中止された。

大会宣言は、経済成長型ではなく環境重視型への意識変革を求めるとし、文書で配布された。実行委員長を務めた阿部昌宏・天台宗宗務総長は「気候変動の問題はまさに容赦なしだ、ということを突き付けられた」と話した。

（西田健作）

朝日新聞社提供

2022年8月5日(金)付　朝刊　京都新聞掲載

世界平和 今こそ祈る

比叡山宗教サミット35周年で集い

世界平和祈りの式典で黙とうする宗教者ら
（4日午後、大津市・延暦寺）＝撮影・辰己直史

比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が4日、「気候変動と宗教者の責務」をテーマに、京都市と大津市で開かれた。天台宗総本山・延暦寺で行われた「世界平和祈りの式典」では、仏教、神道、イスラム教など国内外の宗教関係者約500人が、ロシアによるウクライナ侵攻など各地で戦争・紛争が絶えない中、平和の実現を祈った。

屋外の特設会場に平和の鐘が鳴り響く中、参加者が黙とうした。実行委名誉顧問の大樹孝啓天台座主が「宗教者は気候変動に苦しむ人々に寄り添って支えとなり、問題解決のために信徒と協働して積極的に対処することが求められている」と力強く述べた。

途中で雷が鳴り、激しく雨が降ったために中断し、終了した。「ロシアに対してウクライナからの即時撤退を強く求める」などとする比叡山メッセージが発表された。実行委員長の阿部昌宏・天台宗宗務総長は「気候変動の一端を体験したという思い。気候変動に覚悟して取り組みなさいという自然からのメッセージだと感じる」と語った。

午前は国立京都国際会館（左京区）で約300人が参加し、日本総合研究所の寺島実郎会長の講演や、フィジーの牧師らが意見を述べるシンポジウムがあった。

（河北健太郎）

京都新聞社提供

読売新聞　2022年8月27日(土)付　夕刊

共鳴する平和の願い

比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が今月4日、「気候変動と宗教者の責務」をテーマに、国立京都国際会館（京都市左京区）と比叡山延暦寺（大津市）で開かれた。仏教や神道、キリスト教、イスラム教など国内外の宗教関係者ら延べ約800人が参加、地球温暖化など人類を脅かす問題に宗教者としてどう向き合うか、宗教の違いを超えて取り組んでいく決意を共有した。（渡谷聖都子）

平和を願って黙とうをする宗教指導者たち
（大津市の比叡山延暦寺で）＝中原正純撮影

国際会館では、寺島実郎・日本総合研究所会長が「歴史的大転換期における宗教―心の回復力（レジリエンス）を求めて―」と題して記念講演。宗教は「人間の共感力を引き出す基点」であるとして、「大きな宇宙観の中で、あるべき秩序やルールを模索する心、全体知を求める心こそが宗教の役割」などと述べた。

シンポジウムには、宗教指導者や識者ら4人が登壇。

温暖化で海面上昇の影響を受けるフィジーから参加したジェームズ・バグワン・太平洋教会協議会（PCC）事務総長は、大潮や塩害で農業ができなくなっている地域があると報告。「海抜の低いサンゴ礁の島国の人々が移住を余儀なくされている。開発優先の考えを改め、真にエコロジカルなものに結び直すよう取り組むべきだ」と訴えた。

竹村牧男・東洋大名誉教授は、「草木国土悉皆成仏」という仏教の教えを例に、「本来、仏の国土であれば、我々はそれを損ねることはできないはず」と指摘し、温室効果ガスの排出を減らす「少欲知足」のライフスタイルの実践を提唱した。

「21世紀の人類最大の課題は、破壊的な物質文明の軌道を修正し、再び生物全体が連切に共生できる豊かな生命文明に向かうことだ」と指摘したのは園田稔・秩父神社宮司。「神道や仏教を含めた日本の精神的伝統が育んできた霊的生命観が、その指針となるのではないか」と語った。

デスモンド・カービル・アジア宗教者平和会議（ACRP）実務議長は気候変動対策として「自分たちの礼拝場所や宗教施設の改造から始めてはどうか」と提言。断熱材、防湿材の活用や、太陽光パネルや風力発電など再生可能エネルギーの活用を呼びかけ、より実践的な行動をとる必要性を互いに確認し合った。

比叡山上での「世界平和祈りの式典」では、ウクライナの国花ヒマワリが飾られた祭壇に諸宗教の指導者が並び、「平和の鐘」に合わせて黙とう、ロシアによるウクライナ侵略の早期終結などを願った。

その時突如、雷鳴がとどろき、豪雨が会場を襲った。大樹孝啓天台座主が主催者を代表して「私たち宗教者は気候変動に苦しむ人々に寄り添い、問題解決のために積極的に対処することが求められている」とあいさつ。そして、雷雨に負けないような大声で「（雷鳴は）盛大な神仏の応援のお声だ」と参加者に呼びかけた。

荒天のために式典は途中で切り上げられた。気候変動問題が、本腰を入れて取り組むべき、まさに喫緊の課題であることを、感じさせる場面となった。

比叡山宗教サミット35周年

毎年8月集う

比叡山宗教サミット「世界宗教者平和の祈りの集い」は、1986年、イタリア・アッシジで、当時のローマ教皇ヨハネ・パウロ2世の呼びかけで開かれた「世界宗教者平和行願集会」の精神を引き継ぎ、翌87年にスタート。以来、毎年8月、信仰の異なる国内外の宗教者が比叡山に集い、世界平和を祈願してきた。

東西冷戦下での第1回大会のテーマは「平和への道」。ボスニアや中東などで民族紛争が勃発していた10周年（97年）には「奪い合いから助け合い」、東日本大震災後の25周年（2012年）には「自然災害の猛威と宗教者の役割」をテーマに、平和への取り組みを模索してきた。

文化

気候変動対策など提言

読売新聞社提供

毎日新聞　2022年9月3日(土)付　夕刊

岐路の風景

夏彩り35年「比叡山宗教サミット」

最澄（767～822年）が開いた天台宗総本山・比叡山延暦寺（大津市）に、仏教だけでなく神道、キリスト教などさまざまな宗教者が集い、共に平和を祈る。そんな光景が夏の風物詩となって今年で35年になる。1987年に第1回が開かれた「世界宗教者平和の祈りの集い」、通称「比叡山宗教サミット」は日本における宗教間対話の画期となった。当初から中心的に携わり続ける天台宗・妙法院門跡（京都市東山区）の杉谷義純門主(79)は「思いをつなぎ続けることに意味がある」と積み重ねの大切さを感じている。

35周年となった今年の「比叡山宗教サミット」では、若手宗教者たちが第1回で採択された「比叡山メッセージ」を読み上げた＝大津市の比叡山延暦寺で8月4日、花岡茂人撮影

祈りと対話　つなぎ続ける

世界の指導者らが交流

87年8月4日、比叡山上に、各国から1000人を超える人々が集った。上空を旋回した報道機関のヘリコプターが去り、静けさに包まれた午後3時半、大講堂前にある鐘楼堂の鐘が打ち鳴らされた。運営を担った「日本宗教代表者会議」の事務局長だった杉谷さんは「やっとこの時が来た」という思いをかみしめた。

杉谷義純さん

■　■

「第2バチカン公会議」（62～65年）でカトリックが他宗教との対話と協調の方向性を打ち出したことを機に、平和のため宗教間交流が注目され始めた。日本でも徐々にそうした取り組みが始まり、やがて「世界トップクラスの宗教者を招き、共に平和を祈る集いを」という機運が高まる。先駆的に宗教の枠を超え活動していた杉谷さんら有志が集い、86年に準備委員会が発足。国内の宗教団体の説得や調整、海外への使節団派遣などに走り回った。「なんとしても成功させたいという信念だったが、前例もなく、すべてが手探りでした」

会場は87年に開創1200年を迎える比叡山に。「81年に当時のローマ教皇ヨハネ・パウロ2世が来日した際、宗教協力の精神として最澄上人の『己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり』という言葉を引用したこともあり、ふさわしいとされました」。宗教間交流に熱心だった当時の山田恵諦座主や、千日回峰行を達成した葉上照澄さんら天台宗内の実力者の存在も推進力となった。86年10月にはヨハネ・パウロ2世がイタリア・アッシジに世界の宗教指導者を招いて平和を祈る集いがあり、その精神を受け継ぐ使命も帯びた。

初の「比叡山宗教サミット」が開かれ熱気に包まれる比叡山延暦寺の広場。上方は根本中堂＝本社ヘリから1987年8月4日

■　■

87年8月3日、京都市内のホテルでサミットは開幕。海外からは仏教、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教、ヒンズー教、シーク教、儒教の宗教者ら約20人が訪れた。翌日の「サミット会議」では各代表が「平和への道」をテーマに提言し「宗教者は、常に弱者の側に立つことを心がけねばならない」などと宗教者の行動指針を示す「比叡山メッセージ」を採択。午後から比叡山に場所を移し、それぞれの儀礼で平和を祈った。5、6両日には参加者の一部が広島を訪問。冷戦下にあって、核兵器の恐ろしさを再認識する機会にもなった。

ただ、メディアからは批判もあった。「一々発言の場面を期待したのでしょう。うわべだけで議論しても仕方ない、祈っていれば平和になるのか、と」。しかし杉谷さんは祈りの重要性を指摘する。「祈ることで人は自分の至らなさに気づき、人と共に歩む気持ちが生まれる。まずそこから始め、対話し、協力し合って行動することにつながるのでしょう」

忘れられない場面がある。20周年だった2007年に招いたポスニア紛争孤児の少女の「平和」と題した絵。そこには教会とモスク とシナゴーグ（ユダヤ教の宗教施設）が橋でつながっている様子が描かれていた。「紛争激化の背景に宗教があった。宗教者には、常に対話の努力が求められているのだと痛感しました」

■　■

35周年となった今年8月4日には、国立京都国際会館（京都市左京区）と比叡山上に延べ約800人が集まった。「気候変動と宗教者の責務」のテーマを象徴するように、比叡山上での式典は猛烈な雷雨に見舞われ途中で切り上げられた。杉谷さんは欠席したが、その様子を聞き「環境問題はギリギリのところまできている。宗教者も気を引き締めてやりなさいというメッセージだろう」と受け止める。

宗教間対話が浸透する中、一般の人の視線も変わったと感じている。「奇異の目が減った分、何か良いことをしてという期待が向けられている。私たちはもう一度心を引き締めなければなりません」【花澤茂人】

＝次回は10月1日

宗教専門紙「週刊仏教タイムス」編集長　工藤信人さん

「メッセージ」いかに実践

1988年に宗教記者となったので最初の比叡山サミットは取材していませんが、その後は直接、間接的に取材を続けてきました。

東日本大震災翌年の2012年のサミットは印象に残っています。25周年に当たり、恒例の「比叡山メッセージ」に「核燃料から生じる危険な廃棄物の安全な処理方法が、未だ見出せない現実一つをとっても、原発を稼働し続けることは宗教的、倫理的に許されることではない」とありました。東京電力福島第1原発の事故を体験し、脱原発の姿勢を共有したのです。けれども、これに触発されて脱原発を訴える教団や宗教者はさほど多くありません。こうした「メッセージ」をいかにして行動に移すかは課題だと思います。

以前、縮小を含めてサミット見直しの声が天台宗内部から上がったことがありました。結果的に大きな見直ししはありませんでしたが、苦労を重ねながらの35年だったと思います。今年の式典では青年宗教者が第1回の「メッセージ」を読み上げました。サミットがいつまでも次世代を担う諸宗教青年の育成と交流の場であってほしいと思います。

毎日新聞社提供

2022年9月6日(火)付　朝刊　京都新聞掲載

神と環境を結ぶ、宗教者の務め

比叡山宗教サミット35周年記念で集い

比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が8月4日、京都市と大津市で行われ、仏教、神道、イスラム教など国内外の宗教関係者が一堂に会し、世界平和の実現を祈り、宗教者の役割についての知見を深めた。国立京都国際会館（左京区）では「気候変動と宗教者の責務」をテーマにしたシンポジウムがあり、約300人が参加した。（沢田亮英、河北健太郎）

気候変動テーマに京でシンポ

シンポジウムでフィジーの地球温暖化の影響を語るジェームズ・パグワンさん（左から3人目）＝京都市左京区・国立京都国際会館

シンポでは、地球温暖化による海面上昇に直面する南太平洋からの参加者が、自然と強く結びつく地域の精神性を語り、求められる取り組みを訴えた。

「人間は生態系の一部であり、決して生態系の上に立つものではない。18の島しょ国・地域が加盟するキリスト教組織「太平洋教会協議会」の事務総長で牧師のジェームズ・パグワンさん＝フィジー＝は祖先から受け継ぐ自然への考え方を披露した。象徴的な例として、赤ちゃんが生まれると苗木を植え、根元にへその緒を埋め、大地に根付いて子が成長するよう願う風習を紹介した。

その上で、「地球の支配と生物の採取というイデオロギーに基づいた西洋の開発モデルは、壊滅的な結果を招いた」と批判。「私たちは太平洋の人々は気候変動の影響を直接受ける最前線にいる。持続可能な開発と促進されたことが、実際には持続可能ではなかったと体験してきた」と主張し、「深い海の底から、山の頂から、生き物が発するうめき声や最も弱い者の叫び声が聞こえる。これらの声を増幅して伝えることが、神と環境との絆を持つ宗教者としての私たちの務めだろう」と訴えた。

◀世界平和祈りの式典の後、記者会見に臨むパグワンさん（大津市・延暦寺会館）＝撮影・岡江直史

島しょ国の牧師ら弱者の声代弁

宗教者が具体的に取り組むべきこととして環境問題に関する公の討論への参加などを挙げた後、身につけていたペンダントを掲げた。「この十字架は、もろさを思い起こさせる」。自身の妻の実家があるキリバス共和国では、海面上昇で島全域が大潮に覆われ、塩害で農業が困難になっている。十字架はそのキリバスの子どもたちが集めた貝殻で作られたとし、「現在と未来の世代の生活が私たちにかかっていることを日々思い起こさせてくれる」と語った。

22カ国が参加するアジア宗教者平和会議の実務議長デスモンド・カービルさん＝オーストラリア＝は、巨大都市の気候変動と宗教者の役割について話した。食料やエネルギーの大量消費、化学物質による大気汚染などを巨大都市の課題に挙げ、「宗教者として、私たちは気候変動をその複雑な側面も含めて認めなければならない。対処しなければますます危機的な状態に陥る」との認識を示した。

「どのような信仰でも、神様、仏様によって創造された環境を大切にしなければならないという教えは共通している」とし、「まず、自分たちの礼拝場所や宗教施設を改造することから始めては」と呼び掛け、環境に配慮した資材の活用や緑化などを提案した。特に廃棄物の問題が重要とし、「地球環境を守り巨大都市に新たな未来をひらくため、倫理的な枠組みを創設する上で宗教が果たすべき役割は大きいが、まだ十分に活用されているとは言えない」と指摘した。

日本からは秩父神社宮司で京都大名誉教授の薗田稔さん、東洋大名誉教授の竹村牧男さんが参加し、神道や仏教の思想から気候変動に対して果たすべき役割を語った。

偏狭な価値観の世界「全体知」で導いて　日本総研会長の寺島実郎さん

シンポジウムに先立ち、日本総合研究所会長の寺島実郎さんが「歴史的大転換期における宗教」と題して記念講演した。

寺島さんは「人間の心や知の動きを象徴するキーワードに認識と霊識がある。認識は学習を通じて記憶し、目に対し最速の手段を遠ぶ知の活動のこと。近い将来、認識力では人工知能（AI）が人間を超えるのを目にすることになるだろう」と展望を語った。

その上で、「AIが超えられないものが霊識だと思う。人間は客観的に考えると盗当ないことに行動を起こすときがある。恋人や子どものためなら命を惜けても構わないという情が心に働く。これが人間の人間たるゆえんではないか」との考えを示した。

世界各地での宗教者との出合いを振り返り、「霊識の深さと人間としての心の大きさがあった。宗教は自らを見つめる力の強さのことでもある。より大きな価値が自分を見つめているということへの謙虚さが、世界の宗教者に共通する価値だと感じている」と話した。

ロシアによるウクライナ侵攻にも触れ、「宗教は活力の剣だと思う。ウクライナ侵攻ではロシア正教とロシアの国家権力が一体となり、合理的な判断を超えた戦争の美化、正当化が起こっている」と指摘。一方で、「文化力の結晶である宗教は自らの視界を広げ、相対するものに向き合い、相手の立場に一歩踏み込んで共感する心を動かし、美や正義というものに対して意識を向ける力がある。それは一言で言うと『全体知』。偏狭な価値観や専門性に埋没しがちな世界を、全体知で考えることに導くことが、世界の宗教者の果たすべき役割だと思う」と語った。

記念講演で宗教について語る寺島実郎さん（京都市左京区・国立京都国際会館）

京都新聞社提供

仏教タイムス　2022年7月7日(木)付

比叡山宗教サミット35周年　実行委員会が会見

「気候変動と宗教者の責務」諸宗教の力を結集し行動へ

8月4日

比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が8月4日、京都国際会館（京都市左京区）と天台宗総本山比叡山延暦寺（滋賀県大津市）で開催される（主催＝同実行委員会）。「気候変動と宗教者の責務」をテーマに国内外の宗教者ら400人が参加予定。6月27日に京都市内の本天台で阿部昌宏実行委員長（天台宗宗務総長）らによる記者会見が行われた。

▲記者会見に臨む大樹孝啓名誉顧問ら実行委メンバー

◀「祈りの集い」ポスター

大会名誉顧問を務める大樹孝啓天台座主は、「人間が勝手なことをして自然を破壊し、いろいろな弊害が出ている」と述べ、物質文明の中で環境破壊が起きていることや、戦争や紛争により難民、避難民が大勢出ている目下の地球を憂慮。伝教大師の言葉「一身弁びかけた。

午前10時に国際会館で開会。多摩大学学長の寺島実郎氏が「歴史的大転換期における宗教―心の回復力」のテーマで記念講演する。続く気候変動シンポでは薗田稔氏（秩父神社宮司）、竹村牧男氏（世界宗教者平和会議日本委員会平和研究所所長）、ジェームス・バグワン氏（フィジー、メソジスト教会・太平洋協会協議会事務総長）、デズモンド・カーヒル氏（オーストラリア、カトリック・アジア宗教者平和会議実務議長）が発言する。

その後、延暦寺に移り平和の鐘を鳴らし、祈り、そして「比叡山メッセージ2022（仮称）」を発表する。5年前に折り鶴を納めた「祈りのオーブ」も登場する。

比叡山宗教サミットは1986年にローマ教皇ヨハネ・パウロ2世が提難く、衆力成じ易し」（『伝述一心戒文』）を引き、「一人の身では僅かな力しか出ないけれど、大勢の心を合わせた力によっていろんなことは成り立つ。この真理はいつまでもその通り」とし、諸宗教が協力して世界平和の構築のため行動を起こさなければならないと呼

氏（世界宗教者平和会議日本委員会平和研究所所長）、ジェームス・バグワン氏（フィジー、メソジスト教会・太平洋協会協議会事務総長）、デズモンド・カーヒル氏（オーストラリア、カトリック・アジア宗教者平和会議実務議長）が発言する。

唱した「アッシジ平和の祈り」の精神を受け継ぐもの。そこで同じく平和の祈りを受け継ぐカトリックNGO団体・聖エジディオ共同体のアジア地

比叡山・高野山・神道　共同提言から10年の節目

今年は比叡山宗教サミット35周年のほか、ローマクラブが「成長の限界」を提言して50年、国連リオサミットから30年目の年だが、平成24年（2012）に開催された伝統宗教シンポジウム「宗教と環境」で比叡山、高野山真言宗総本山金剛峯寺、神社本庁が自然環境を守る共同提言を出してから10年の節目でもある。この提言では「大地震、大津波、それに伴う原子力発電所の大事故を経験し、ようやく従来の生活態度を根本的に変革することなくして、私たちに希望ある未来は約束されない」など

城担当部長のアゴスティーノ・ジョパニョーリ氏が招聘される。

大会の模様はYouTubeでオンライン配信される。

と訴えた。

質疑応答でこの提言の精神をどう活かすかについて問われると、司会進行役の小林祖承氏（天台宗総務部長）が同シンポでパネリストだったことから回答。「かなり強いメッセージを発信させていただいたように思います。10年経つと時代の速さを感じますね」としつつ、10年前に比べて地球環境は「飛躍的に悪化している」と如実に感じている」とし、精神を活かすよう精一杯努力すると述べた。

温室効果ガス発生や環境破壊を推進する企業に投資する金融機関からの預金引き上げ「ダイベストメント」を宗教界はどう考えるかという質問には杉谷義純実行委員会事務局顧問（天台宗妙法院門跡門主）が「将来的には社会全体が健全な方向に行くお手伝い、姿勢を持っていくべきであろうと個人としては思っている」と述べながらも、現状では金融や投資に対し宗教界が確固たる考えを持つようにはなっていないと指摘。今後の啓発が必要だとした。

仏教タイムス社提供

中外日報　2022年8月10日(水)付

比叡山宗教サミット

「環境重視へ」意識変革訴え

宗教者ら延べ800人参加

世界平和を祈り黙祷する諸宗教の代表者ら

「気候変動と宗教者の責務」をテーマに、比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が4日、国立京都国際会館（京都市左京区）と天台宗総本山比叡山延暦寺（大津市）で開かれ、国内外の宗教者ら延べ約800人が参加した。実行委員会で起草した「比叡山メッセージ2022」が式典で採択され、宗教者は「従来の経済成長型のライフスタイルから、環境重視型（共生型）への生き方」に意識を変革すべきだと訴えた。

午前中に国際会館で開かれた開会式とシンポジウムには約300人が参加した。日本総合研究所会長の寺島実郎氏が記念講演し「人間の意識の高まりの結晶としての宗教とは、内省力と共感力だ」と指摘。「相手の立場に立った人間の共感力をもってインテグリティ（全体知）を求めることが宗教の役割だ」と強調した。

シンポジウムでは4人の宗教者・識者が登壇し、太平洋教会協議会（PCC）事務総長のジェームズ・バグワン氏（フィジー国籍）は「異常気象の危険にさらされているキリバスでは、海面上昇で大潮や塩害で農業ができない状態」と明かし、宗教者に温暖化防止の取り組みを求めた。

比叡山上に移動して大テントの下で行われた式典では、開始間もなく雷鳴がとどろく中、午後3時半に「平和の鐘」の合図で約500人が黙祷した。続いて大樹孝啓・天台座主が、横殴りの雨にさらされながら、主催者を代表して「私たち宗教者は気候変動に苦しむ人々に寄り添ってその支えとなり、積極的な対処が求められる」と挨拶。地面をたたく雨音をかき消すような大声で「大きな神仏の掛け声に励まされた思いだ」と泰然と呼び掛けて降壇した。

式典は中断し、参加者は建物などに避難。約25分後に阿部昌宏実行委員長（天台宗宗務総長）が中止を決定し、散会となった。非常事態を踏まえて「比叡山メッセージ2022」は参加者の同意をもって採択されたと見なし、参加者に配布された。

終了後の記者会見でバグワン氏は「本日の雷雨は気候変動の一つの印だ」と話し、阿部実行委員長は「（ユーチューブ配信の）機材に落雷して人命に万が一のことがあってはならない」と中止の理由を説明した。中止は初めてという。

ステージ上で黙祷した宗教者は、大樹座主のほか、以下の通り（紹介順）。宍野史生・日本宗教連盟理事長▽レオ・ボッカルディ駐日バチカン大使▽バグワン氏▽土屋潔・日本キリスト教連合会委員長▽出口紅・大本教主▽デスモンド・カーヒル・アジア宗教者平和会議実務議長▽アゴスティーノ・ジョヴァニョーリ聖エジディオ共同体アジア地域担当部長▽黒住宗道・黒住教教主▽石附周行・曹洞宗管長▽里雄康意・全日本仏教会理事長▽石倉寿一・新日本宗教団体連合会理事長▽金岡正和・神社本庁理事▽遠藤利夫・日本ムスリム協会会長▽宮本惠司・妙智會教団法嗣▽大塚喜直・カトリック京都司教区司教▽植松誠・世界宗教者平和会議日本委員会理事長▽田中安比呂・賀茂別雷神社宮司▽五條良知・全日仏副会長▽馬渕直樹・日吉大社宮司▽阿部実行委員長▽國富敬一・同副委員長（立正佼成会理事長）（須藤久貴）

中外日報社提供

仏教タイムス　2022年8月11日(木)付

8月4日　比叡山宗教サミット35周年 平和の祈りの集い

雷鳴と豪雨 山上式典を中断

参加者「気候変動を実感」

稲光と雷鳴、豪雨となった8月4日の比叡山宗教サミット35周年の式典。比叡山上で午後3時に開式し、同5時頃までの予定だった世界平和の祈りの式典は、あまりにも激しい雨と雷の中断となり、午後4時前に中止を宣言した。「気候変動と宗教者の責務」をテーマに開かれたサミットだが、猛暑続きと突然の雷雨に「気候変動を身近に感じた」と参加者は口を揃えた。そうした中で環境重視のライフスタイルへの転換を求めた「比叡山メッセージ2022」が発表された。午前中の国立京都国際会館での開会式典・記念講演・シンポジウムは予定通り行われた。主催は「世界宗教者平和の祈りの集い」実行委員会（委員長＝阿部昌宏・天台宗務総長）。

午後3時半、鐘の音と共に平和の祈りが捧げられた

午後3時、山上のステージに実行委員会の役職者や海外からの来賓が登壇して開幕。ステージ前のヒマワリはウクライナ国花で、戦争終結の願いが込められている。

そのもとは1987年、最初の比叡山宗教サミットで発信された「比叡山メッセージ」が青年宗教者6人によって順次読み上げられた。35年前のサミットの原点を確認すると共に、次世代へのバトンタッチである。

少しずつ雨が強くなる中、午後3時30分、山内の「平和の鐘」の鐘打に合わせて、オンライン視聴者を含めて全国一斉に平和の祈りが捧げられた。続いて主催者代表として大僧正・天台座主が登壇して挨拶。地球上で頻発する大規模豪雨や洪水、高温による山火事、氷河融解といった事象を指摘し、「私たち宗教者は気候変動に苦しむ人々に寄り添ってその支えとなり、問題解決のために積極的に対処することが求められる」と言葉に力がこもっていたように感じた。

ここで一際雨が激しくなり、中断。参加者は「一隅を照らす会館」などに避難した。天気が小康状態となったところで、実行委員長の阿部宗務総長が登壇して「比叡山メッセージ2022」を発表し、苦渋の中止宣言。最後に熱とりをもって式典を閉じた。

阿部総長はこの後の記者会見で天気の急変について、「まさに気候変動の一端をわれわれは体験したと捉えている。覚悟して取り組みなさいよ、と天が宗教者に示されたのだという思いを持っている」と応答。参加者たちも同様に「気候変動を実感するサミットだった」と感想を述べ合っていた。

会場を襲った猛烈な雷雨により、式典を中断

宗教者は常に弱者の側

開会式で原点確認

「気候変動と宗教者の責務」をテーマにした今年の比叡山宗教サミット。午前中、国立京都国際会館（京都市左京区）では開会式・記念講演・シンポジウムが開かれた。会場には感染対策を徹底した上で約300人が参集し、オンラインで同時配信された。

実行委員会や来賓を背に実行委員長の阿部宗務総長が挨拶。地球温暖化や環境破壊に言及した上で、「これらの原因は、人間の際限なき欲望がもたらした結果であり、神仏からの警告と受け止めるべき」と表明し、宗教者が率先して実践するよう主張した。

阿部総長はまた「宗教者は常に弱者の側に立つことを心掛けねばならない」との最初のサミットメッセージを紹介し、今一度思い起こし、全人類が平和の恩恵に浴するために祈りを捧げたい」と会場に呼び掛けた。

35周年サミットの意義について述べる阿部総長

フランシスコ・ローマ教皇のメッセージを教皇庁駐日大使のレオ・ポッカルディ大司教が代読。地球環境や生態系の危機に言及し、「環境に対する配慮は人に対する配慮に比して成長していかなければならない。より適切で持続可能な環境再生の形態と行程への復帰は、人々の精神を高揚させることでしょう」と提示した。

寺島氏が記念講演

心の回復には共感力

記念講演は（一財）日本総合研究所会長で多摩大学学長の寺島実郎氏が「歴史的大転換期における宗教―心の回復力（レジリエンス）を求めて」と題して行った。

現代は、動物とAI（人工知能）から人間とは何かが問われてきていると言う寺島氏。ゲノムの解析により人間とチンパンジーの差は1・2%の差しかない。人間は民族や宗教・イデオロギーの違いで同種族を殺しもするが、共感力も併せ持つ。他方、AIが人類の知能を超えるシンギュラリティが2045年頃に来るとされる。では、人間とAIの差は何か。認識（レコグニティス）する力と意識（コンシャスネス）だと解説する。

共感と意識を軸にして寺島氏は、宗教の淵源からキリスト教の伝道史と、究極の内省であるブッダの仏教が衆生救済の大乗仏教へと「加上」していった歴史を感説した。

また比叡山を開いた最澄の「一隅を照らすものは国の宝なり」の言葉を引きあいに、比叡山で学んだ法然、親鸞、日蓮、道元、栄西といった鎌倉新仏教の祖師を取り上げ「自分の殻から、自分を超えていくような者を育てていくことがとれほど偉大なことかと」説いた。

そして現代にあって「宗教は諸刃の剣」と指摘。ロシアによるウクライナ侵攻を例に「ロシア正教会は真摯な良族宗教だが、国家と宗教と一体となった時、合理的な判断を超え戦争の正当化が起きている」。また最近の事件から「宗教の名の下に弱者から収奪し、マインドコントロールしている。あまりにもひどい。宗教者がいちばん腹を立てていると思う」と宗教悪の面を摘示した。

一方で「宗教の持つ対話の基盤の可能性」に言及し、人間の共感力を引き出す基点、相手の立場に立って共感力を持って向きあう力を引き出すのは宗教者の力」と期待。さらに35周年のテーマに加して「地球環境について、あるべきルールを模索する心は、やはり宗教を基底として生まれる」と述べた。

寺島氏は最後に鈴木大拙が言い続けたという「外は広く、内は深い」を紹介し、これを「全体知」と翻訳。「偏狭な価値観や専門性に埋没しがちな世界に、全体知をもって考えよ、と持って行く力が宗教の役割」とエールを送った。

寺

寺島氏は“共感力”を強調した

（2面に関連記事）

仏教タイムス社提供

仏教タイムス　2022年8月11日(木)付

比叡山サミット「気候変動」シンポ

未来の他者に共感を

草木国土全てがすでに成仏

海面上昇に直面

太平洋島嶼国

比叡山宗教サミット35周年記念シンポジウムが4日午前、「気候変動と宗教者の責務」をテーマに開催された。

薗田稔・秩父神社宮司（京都大学名誉教授）は、「霊的『生命観』の復権と『生命文明』への予感」について発題。「人類最大の課題はこの破壊的な物質文明の軌道を修正して、再び地上の生物全体が適切に共生し人類もまた健康に生存するような、豊かな『生命文明』へと向かうことではないか」と提起し、「神道や仏教をも含めた日本の精神的伝統が育んできた本来の霊的生命観」に言及した。

メソジスト教会の牧師で太平洋教会協議会のジェームズ・バグワン事務総長（フィジー）は、気候変動による海面上昇で移住せざるを得ない事態に直面している太平洋島嶼国・地域の代表として世界に緊急メッセージ。「地球の肺」と呼ばれる豊かな海域は全世界的な取り組みでなければ守れないと訴え、「私たちが祖先から受け継いだ考え方や知識では、人間は生態系の一部であり、決して生態系の上に立つものではない」と語った。

その上で身に着けている十字架を提示。「この十字架は、私の妻の実家であり異常気象の危険にさらされているキリバス共和国の子どもたちが集めた貝殻で作られた。この十字架は、現在と未来の世代の生活が私たちにかかっていることを日々思い起こさせる」と語った。

竹村牧男・東洋大学名誉教授は、仏教思想から環境問題への取り組み方を提言。「仏教では古来、個体すなわち身・心と環境世界とは不二一体と考えられてきた」と解説した上で、「環境を傷つけることは自己を傷つけることになるのであり、このことをよく理解すれば、健全な環境世界の保護・維持に努めなければとの思いも生まれるものと思う」と述べた。

日本天台宗の教理「草木国土、悉皆成仏」を、「草木国土も全て成仏する」ではなく「草木国土も全てすでに成仏している」と解釈。「この世界が本来、仏の国土であれば、それを損ねたり壊したりできないはず」と論じた。

コーディネーターの和田惠久巳・実行委員会委員（立正校成会総務部長）が応答。「今だけでなく未来も含めた他者の苦に思いを馳せる共感・共苦を意識する」ことの重要性を全宗教者と共有した。

宗教・有識者4氏が信仰による環境問題への取り組み方を提言し、早急に行動する必要性を強調

経済から環境へ

比叡山メッセージ2022

アジア宗教者平和会議のデスモンド・カーヒル実務議長（オーストラリア・ロイヤルメルボルン工科大学名誉教授）は、「巨大都市と気候変動」の面から警鐘。「廃棄物を削減・再利用・リサイクルする循環型経済に転換する必要がある」とし、「倫理的・宗教的な枠組みを創設する上で、宗教者が果たすべき役割は大きい」と指摘した。

発表された比叡山メッセージ2022は次の通り。（要旨）

1986年にイタリア・アッシジで開かれた「世界平和祈願の日」の精神は、翌1987年われわれを比叡山宗教サミット「世界宗教者平和の祈りの集い」の開催に導いた。如何なる宗教にとっても根本的であるとの認識に立ち、「正義と慈悲」を通じて平和の希求を訴え、同時に「宗教者は常に弱者の側に立つことを心がけねばならない」ことを再確認した。

それから35年を経た今日、深刻な地球温暖化をこのまま放置しておけば人類はもとより、生物の生存そのものを許さない状態になることが科学的にも証明されている。

昨年10月英国のグラスゴーで開催されたCOP26で、難航の末ようやく世界の平均気温の上昇を産業革命以前より1・5度以内に抑えることが合意された。この数値目標の達成には相当な困難が予想されるが、現実に近年世界各地で起こる豪雨災害や熱波による森林火災、さらに島嶼地域の大規模な浸水など深刻な被害が伝えられ、すでに看過は許されない状態となっている。

従来の経済成長型のライフスタイルから、環境重視型（共生型）への生き方のほうが、より人間らしい生き方であるという意識の変革に努めていくべきであろう。その意味で宗教者の果たすべき役割は大きく、その責務は大変重いものがあると自覚するものである。

この環境重視型のライフスタイルは、今もなお猛威を振るうコロナ禍においても、きわめて有効な手段を発揮する基礎となり得ている。さらなる情報公開や国際支援が求められるところである。

最後に、今回の集いの半年前より始まったロシアのウクライナ侵攻に対して、断固たる抗議をする。世界の紛争を調停する国連常任理事国であるロシアによる国際法を無視した暴挙は、全く容認することはできない。

ロシアに対してウクライナからの即時撤退を強く求める。何としても軍事行動を即座に中止して対話への道筋を開くべく、国連常任理事国はじめ関係国は今こそ知恵を凝らすべきであることを、声を大にして訴える。さらに戦争は人間による最大の環境破壊の行動であることを心に刻むべきであろう。

仏教タイムス社提供

文化時報　2022年8月19日(金)付

気候変動と責務議論

35周年で新メッセージ発信

比叡山宗教サミット

超宗派の宗教者らによる「比叡山宗教サミット35周年記念『世界宗教者平和の祈りの集い』」が4日、「気候変動と宗教者の責務」をテーマに開かれた。約800人が参加し、午前は国立京都国際会館（京都市左京区）で開会式典やシンポジウムを開催。午後は比叡山延暦寺（大津市）で平和への祈りをささげ、「比叡山メッセージ2022」を発表した。　＝4面に関連記事

㊤国立京都国際会館での開会式典
㊦激しい雷雨の中、超宗派で平和の祈りをささげた

開会式典では、ローマ教皇庁駐日大使のレオ・ポッカルディ大司教が「私たちは気候変動の悪影響に脅かされている一つの家に、共に住まう家族の一員であるという認識を新たにし、強化していく使命を授かっている」などとしたローマ教皇フランシスコの平和のメッセージを代読した。

記念講演は寺島実郎・日本総合研究所会長が「歴史的大転換期における宗教―心の回復力（レジリエンス）を求めて」の講題で話し、人類史を踏まえて「宗教は文化力の結晶。相手の立場に一歩踏み込んで共感する心を動かすことが宗教者の果たすべき役割」と強調した。

シンポジウムには、秩父神社宮司の薗田稔氏、東洋大学名誉教授の竹村牧男氏、太平洋教会協議会事務総長のジェームズ・バクワン氏、アジア宗教者平和会議（ACRP）実務議長のデスモンド・カービル氏が登壇。和田惠久巳立正校成会総務部長が進行を務めた。

比叡山延暦寺での世界平和祈りの式典では、35年前の「比叡山メッセージ」を各宗派の次代を担う若者らが朗読。平和の鐘を打ち鳴らして黙禱した後、実行委員会名誉顧問の大樹孝啓天台座主が「気候変動に苦しむ人々に寄り添って支えとなり、信徒などと協働して積極的に対処することが求められている」と呼び掛けた。

新たに出された「比叡山メッセージ2022」は、環境問題は万人に共通の責任があると説き、経済成長型から環境重視型へと生き方の意識変革に努めるよう提言。「宗教者の果たすべき役割は大きく、その責務は大変重い」と発信した。

合わせてロシアのウクライナ侵攻に「断固たる抗議をする」と述べ、戦争が最大の環境破壊であると訴えた。

雷雨で体感…一部中止

祈りの式典は途中で激しい雷雨に見舞われ、大樹座主のあいさつ後のプログラムが35年目で初の中止となるなど、参加者らは期せずして気候変動の影響を体感した。

熱中症対策で初めて建設した大型テントの内側まで風雨が降り込み、落雷もあったことから、参加者の安全を考慮して中止を判断した。10年ぶりに予定していた六つの宗教別の祈りなどは行わず、比叡山メッセージ2022も書面での発表となった。雷雨の中であいさつを終えた大樹座主は「神仏の激励と受け取った」と力強く語った。

式典後の会見で、実行委員長の阿部昌宏・天台宗宗務総長は「宗教者の覚悟が問われている。各教団へ比叡山メッセージ2022を持ち帰り、檀信徒の教化を進めてほしい」と話した。

文化時報社提供

記 者 発 表

6月27日(月)　於 ウェスティン都ホテル京都

記 者 会 見

8月4日(木)　於 延暦寺会館

あとがき

比叡山宗教サミット35周記念「世界宗教者平和の祈りの集い」
実行委員会副委員長　立正佼成会理事長　**國　富　敬　二**

比叡山宗教サミット35周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が、神仏のご加護と関係者各位のご尽力により、国内外から多くの方々をお迎えして開催できましたことに衷心より御礼申し上げます。

アッシジの精神を継承し、比叡山宗教サミットが開催されたのは昭和62年のことでありました。爾来、天台宗さまをはじめ、各宗教宗派の諸先輩方のご尽力のもとに運営が継続され、このたび35周年の催事を迎えるに至りました。

当日に申し上げましたように、「比叡山宗教サミット」の精神の源流は、祈りと対話であると、私自身は確信しています。祈りと対話を重んじ、今日まで歩んできた日本の宗教界は、「自他一如」の一つのチームであり、世界に誇れるモデルとして今こそ再評価されるべきと受けとめています。宗教者として大切な姿勢を私たちに示すとともに、強い絆で結ばれたチームに育ててくださった諸先輩方に、改めて感謝させて頂きます。

本年は、「気候変動と宗教者の責務」がテーマに掲げられました。国立京都国際会館で行われたシンポジウムでは、「神仏に見つめられて生きている」という謙虚な姿勢を具え、共感力を働かせて他者と向き合えるのが宗教者であり、その姿勢と力は世界的課題の解決に不可欠とのご発言がありました。大いなるいのちに生かされていることへの感謝と自然への畏敬の念を深めつつ、今後も志を同じくする皆さまと手を携えてまいりたいと存じます。

また、比叡山上に会場を移して厳修された式典も、心に強く残るものとなりました。激しい雷鳴と大粒の雨に見舞われるなか、降り注ぐ砲弾の恐怖に怯え、震えるウクライナの人々の姿が脳裏に浮かびました。

世界平和の実現は、誠に困難な道程です。祈りと対話を重ね、弛まぬ努力を続けても、私たちが、先達も夢見た平和境を今世に見届けることは叶わないかもしれません。しかし、たとえそうであっても、後世の方々にこの願いを託せるよう、日々の暮らしのなかで真摯に実践させて頂きます。

「この秋は　雨か嵐かしらねども
今日のつとめの　田草取るなり」

二宮尊徳翁が遺された歌で示された生き方を模範に、刹那に願いを込めて精進することを改めて決意致します。

結びにあたり、集いの運営にご尽力された皆さま、本誌の発行にご協力くださいました皆さまに甚深の謝意を表する次第です。

合掌

比叡山宗教サミット35周年記念
世界宗教者平和の祈りの集い
発行日　二〇二三（令和五）年三月一日

発行所／発行人　滋賀県大津市坂本四―六―一一　天台宗務庁内
比叡山宗教サミット35周年記念
「世界宗教者平和の祈りの集い」実行委員会
電話　〇七七（五七九）〇〇二二
印刷所　ヨシダ印刷株式会社

主催
比叡山宗教サミット35周年記念
「世界宗教者平和の祈りの集い」実行委員会